

富田林の自然

人と生きものがひびきあう
里山をめざして



No.2
2004年3月

富田林の自然を守る市民運動協議会

表紙の写真

果樹の丘とログハウス

富田林の自然を守る会は、2001年4月にもおよぶネザサに覆われた奥の谷の丘を刈り取り、栗、杏、柿、無花果などを植え、果樹の丘と名付けました。2003年にはこの丘の以前の地権者の吉川忠様のご遺族の藤本隆子様からログハウスを寄贈していただきました。

目 次

「富田林の自然」の発刊によせて（富田林市長 多田利喜）	2
里山の夢は広がる	3
＜市民と行政の協働で、自然豊かな富田林を＞（副会長 松原安茂）	
奥の谷周辺のチョウたち	4
里山管理と生物多様性（武田義明）	9
錦織公園草花歳時記そしてレッドデータ植物について（浅野晴也）	13
奥の谷モデル地区の将来プラン	17
平成15年度「自然環境保全活用調査」報告書より抜粋	
協議会参加団体の活動紹介	21
（富田林の自然を守る会、錦織公園自然友の会、富田林勤労者山岳会「嶽の会」、 NPO法人里山倶楽部、「石川あすかプラン」を考える市民連絡会、NICE）	
「里山管理ボランティア養成講座」受講者の感想	24
平成15年度 協議会事業報告	25

「富田林の自然」の発刊によせて

富田林市では、住む人が、我がまち「富田林」を故郷として、誇りをもっていただけるように、市域に残された寺内町など貴重な歴史的遺産や嶽山周辺など南部山地部や石川の豊かな自然環境資源の保全と活用を市民ぐるみで推進するとともに、彼方地区の奥の谷の里山保全活動をボランティア団体との協働で進め、石川を清流の流れる親水オアシスとして、水辺の観察などの環境学習を通じて、良好な環境を守るための市民意識の高揚に努め、水とみどり・歴史が調和した生活者優先のまちづくりを目指しております。

森や河川には、リス・メダカ・カエルなどさまざまな生物が生息し、人間と共存していました。自然に程よく人の手が入り、バランスのとれた生態系が保たれていましたが、戦後の都市開発とコメの減反で里山は全国的に急速に失われています。昔話に出るような懐かしい風景は過去のものとなりつつあります。自然環境保全には大勢の市民の理解と運動の参加が必要となっています。

「富田林の自然を守る市民運動協議会」では、里山管理作業や自然クラフト、野草を食べる会、里山管理ボランティア養成講座や国際ワークキャンプなどの自然環境保全活動が進められていますが、そのまとめとして、この度「富田林の自然」の発刊が行われました。

今後も、参加団体の自主性を大切に、知恵と力を発揮していただき、市民のみなさんと共に活動を益々発展させていただきますよう、お願いいたしまして、ごあいさつとさせていただきます。

平成16年3月

富田林市長 多田 利喜

里山の夢は広がる

市民と行政の協働で、自然豊かな富田林を

富田林の自然を守る市民運動協議会
副会長 松原安茂

羽曳野丘陵の南端、P Lタワーのある丘陵から河内長野市との境界までの丘陵地帯は、赤松林の小さな山々が連なっていて、いろいろなきのこや松茸も採れた里山がひろがっていました。人々にはこの山々は山菜採りや、きのこ狩り、薪拾いなど生活になくてはならない里山として共存し大切に利用してこられたと思います。

しかし経済成長と共に開発が進み、最後に残されていた現在大阪府営公園になっている錦織公園の里山も、ある大手建設会社を買収されていました。もしそのまま住宅地として造成されていたら、おそらく山々は崩され谷は埋められ、樹木草花はほとんどなぎ倒され里山の面影はなくなっていたのではないかと考えられます。

幸いなことに、理由はしりませんが開発出来なくなり大阪府が公園用地として買収しました。公園整備については大阪府立大学農学部が監修し、昔からの里山を復活させ、里山公園にしようという計画で整備されました。

富田林市民にとっては『錦織公園』は里山公園として自慢できる我らの公園になりました。最近公園内を、よく他市から来られた人々や学校の先生方を自然観察しながら案内していますが、山道などを歩いていると「ここは本当に公園の中ですか？」と何度も聞かれます。また、復活した草花、ササユリ、ショウジョウバカマやシュンラン、コ克蘭、ナンバンギセル、コモウセンゴケなど、キノコではハタケシメジ、エリマキツチグリなど観察に参加した子供たちやファミリーも里山の自然の不思議さや、営みの巧みさに歓声を挙げています。

ただ、富田林市民として残念に思うことは、富田林市内にありながら「錦織公園」の運営面で関与出来ないことです。公園内でのボランティア活動や周辺住民参加による「公園をより良くするための活動」など住民参加型の活動が大阪府公園協会の管理下では、いろいろの制約や規制があり交渉を重ねても応じようとはしません。中央では規制緩和、地方分権、民間参加など叫ばれていますが、大阪府下でも地方分権が求められています。

そうなれば本当に素晴らしい我らの『里山公園』が誕生することでしょう。

奥の谷周辺のチョウたち

蝶は多くの虫たちの中でも人々によく親しまれている昆虫の一つです。私たちは奥の谷で昆虫の生息状況を調べていますが、これまでに奥の谷を中心に嶽山周辺で、採集または撮影できた43種類の蝶（8ページ参照）を掲載します。生態写真のないものは奥の谷で採集した標本を撮影しました。



アゲハ

幼虫の食樹はカラタチ、ミカン、サンショウなどのミカン科の植物。写真は吸蜜のためヤブガラシに飛来したところ。



カラスアゲハ

黒色の翅に青緑色の鱗粉が散らばり美しい。近年少なくなっていると聞いていたが、奥の谷で出会えるのは嬉しい。幼虫の食樹はやはりミカン科の植物。



クロアゲハ

後翅の裏の赤い斑を除いて全体が黒色の大型の蝶。蝶道があり同じルートを飛んでいる。奥の谷ではよく見かける。幼虫の食樹はミカン科。写真はノアザミの蜜を吸っているところ。



アオスジアゲハ

両翅に青空の様鮮やかな青い帯を持つ敏捷な蝶。都会でも公園などでよく見かける。幼虫の食樹はクスノキ、タブノキ、シロダモなどのクス科の植物。



ナガサキアゲハ

日本産の黒色アゲハ蝶で後翅に尾を持たないのはこの蝶だけ。南方系の蝶で、図鑑には「大阪の記録は迷蝶と思われる」と記されているが、近年あちこちで記録されている。地球温暖化の影響だろうか。奥の谷で採集できたのは驚きであった。幼虫の食樹はミカン科。



モンキアゲハ

日本産の蝶では最大の蝶。後翅の中央に大きな黄白色の斑紋がある。日陰の林の間を飛んでいるのをよく見かける。幼虫の食樹はカラスザンショウ、カラタチなどのミカン科。写真は東条小学校下の道路脇のアペリアで吸蜜していたもの。もう一枚ピントの良いのを撮ろうとしたが逃げられてしまった。



アサギマダラ

林の間を優雅に飛ぶ姿は何ともいえない。金剛山の山頂付近ではよく見かけるが、奥の谷でこの蝶に出会えたのは嬉しい。ミカン小屋の前の蔓にとまったので夢中でシャッターを切った。幼虫の食草はカメメヅルなどのガガイモ科。



モンシロチョウ

キャベツ畑でおなじみの蝶。ハナムグリが潜り込んでいるノアザミに2匹のモンシロチョウがやってきた。幼虫の食草はキャベツなどのアブラナ科。



スジグロシロチョウ

モンシロチョウによく似ている。モンシロチョウはキャベツ畑や菜の花畑に多いが、この蝶は山地に多い。その名の通り翅脈が黒い筋となっている。幼虫の食草は野生のアブラナ科。



モンキチョウ

モンシロチョウとともになじみ深い蝶である。石川の河川敷でも多く見られる。幼虫の食草はウマゴヤシやコマツナギなどのマメ科植物。



キチョウ

翅は表裏とも黄色で、表面の外縁に沿って黒い帯があり、翅端部が黒い。草間や林間を地上低く飛ぶ。成虫で越冬する。写真は植林地のヒノキの幼木に雌雄が連なっている下で撮っていた。幼虫の食草はメドハギ、マルバハギなどのマメ科植物。



ツマキチョウ

後翅裏面に網目模様があり、前翅の先端が突出している。雄では前翅先端が橙色に彩られている。4月初旬に田圃の近くをひらひらと飛んでいる。幼虫の食草はタネツケバナなどのアブラナ科。



ゴマダラチョウ

草花を訪れることはなく、カブトムシやクワガタムシと同じくクヌギなどの樹液を吸って生きている。石川でも大きなヤナギに集まっているのを見かけることがある。幼虫の食草はエノキ。



イシガキチョウ

白地に黒の不規則な線の模様があり石垣にしていることからこの名がある。南国の蝶で「紀伊半島南部以南に分布」と記載されているが、近年では大阪でもよく採集されている。奥の谷では一昨年初めて見かけた。これも地球温暖化の影響だろうか。珍しい蝶が見られるのは楽しいが複雑な気持ちである。幼虫の食草はイヌビワ、イチジクなどのクワ科。



キタテハ

成虫で越冬する。早春から晩秋まで見られる蝶である。2月の半ばのよく晴れた暖かい日に石川の河川敷で飛んでいるのを見かけた。幼虫の食草はカナムグラ、アサなどのアサ科の植物。幼虫は食草の葉をつづってその中に潜む。



アカタテハ

敏捷に飛翔し、花や樹液に集まる。路上などに静止することが多い。夕暮れに盛んに飛翔活動を行う習性がある。成虫で越冬する。幼虫の食草はイラクサ、カラムシなどイラクサ科。幼虫は食草の葉をつづってその中に潜む。



ヒメアカタテハ

アカタテハによく似ているが、やや小型。アカタテハの様に樹液に集まる習性はない。飛翔は敏捷で路上によくとまる。成虫あるいは幼虫で越冬する。食草はゴボウ、ハハコグサ、ヨモギなどのキク科、カラムシ(イラクサ科)、ゼニアオイ(アオイ科)など。



ルリタテハ

飛翔はきわめて敏速で、路上、石の上などに静止することが多いが、敏感で近づくとすぐ飛び立つ。再び元の位置に戻って静止することが多い。樹液や腐敗物に好んで集まる。花には飛来しない。成虫で越冬する。幼虫の食草はサルトリイバラ、ホトトギス、ヤマユリなどの単子葉植物。



ツマグロヒョウモン

雌の前翅の先端が黒い。奥の谷では最も普通にみられるヒョウモンチョウ。幼虫の食草はスミレ類。



ミドリヒョウモン

後翅裏面は緑色の地に銀白色の帯がある。草原には少なく樹林でよく見かける。幼虫の食草はスミレ類。



イチモンジチョウ

樹間・叢上を活発に飛翔し、緑葉上に静止することが多く、ウツギなどの花に飛来する。食草の葉を巻いて越冬巣をつくり、その中で幼虫で越冬する。幼虫の食草はスイカズラ、タニウツギ、ハコネウツギなどのスイカズラ科。



アサマイチモンジ

イチモンジチョウと酷似している。一般的にイチモンジチョウより少なく、分布は局地的といわれている。習性はイチモンジチョウと殆ど同じ。幼虫の食草はスイカズラ科。



コムスジ

ミスジチョウの中では最も普通の種。道端の小低木の上をひらひら飛んでいるのをよく見かける。越冬幼虫は食そうから離れて、落葉の中で越冬し、翌春食を取らずに蛹化する。幼虫の食草はニセアカシア、ヤマフジ、ネムノキなどのマメ科。



ジャノメチョウ

ジャノメチョウの語源は蛇の目のような模様があることによる。草地上を地上低く飛翔し、草花や樹液に集まる。幼虫の食草はススキなどのイネ科植物。秋産卵し孵化した後、何も食べずに越冬し、翌春食草を食べて、成長する。



ヒカゲチョウ

クロヒカゲとよく似ている。林縁、林間の日陰に多く、クヌギ林やその周辺に多い。写真はコナラ塗った人工の樹液に飛来したもの。幼虫の食草はマダケ、ナザサなどのタケ・ササ類。



サトキマダラヒカゲ

ヤマキマダラヒカゲと酷似する。樹林性で、草地ではみられない。クヌギ、コナラなどの樹液に集まる。蛹で越冬する。幼虫の食草はタケ・ササ類。



コジャノメ

林間の陰湿な場所を好み、薄暗い林の下草にとまる。幼虫で越冬。幼虫の食草はチジミザサ、ススキなどのイネ科。



クロヒカゲ

ヒカゲチョウとよく似ている。樹液に集まる。幼虫の食草はネザサ、などのタケ・ササ類。



ヒメウラナミジヤノメ

小型のジャノメチョウで、裏面に波模様がある。レンゲ田などの明るい場所に現れ、吸蜜する。幼虫の食草はチジミザサ、チガヤなどのイネ科。



アカシジミ

5月下旬～6月上旬に年1回発生する。夕方活動し、クヌギやコナラの梢を飛ぶ。幼虫の食樹はクヌギ、コナラなどのブナ科。



ミズイロオナガシジミ

日本産ミドリシジミ族で最も普通の種。6月上旬に年1回発生。夕方樹上を活発に飛ぶ。幼虫の食樹はクヌギ、コナラなどブナ科。



ルリシジミ

春季最も早く出現する種の一つ。草上も飛ぶが、一般に樹上を飛ぶ習性がある。幼虫の食草は主としてフジなどのマメ科。



ツバメシジミ

路傍、草原、畑地などに普通に見かけるシジミチョウ。幼虫の食草はメドハギなどのマメ科。



ベニシジミ

前翅の表が赤橙色でよく目立つ。路傍、草原、畑地などにごく普通にみられる。幼虫の食草はスイバなどのタデ科。写真はオミナエシに止まったもの。



ゴイシジミ

碁石状の斑紋を全面に配列するのでこの名がある。発生は局部的。幼虫は肉食で、タケ・ササに寄生するタケノアブラムシを食べる。この写真は1996年ごろに奥の谷で撮ったものだが、それ以後見かけない。



ムラサキシジミ

翅表は青藍色で美しい。成虫で越冬する。幼虫の食樹はアラカシ、シラカシなどのカシ類。



コツバメ

年1回早春に発生する。飛翔は敏捷だがすぐ止まる。翅面を太陽光線に直角になるように体を横に向けて日光浴をする習性がある。幼虫はガマズミ、ツツジなどの花を食べて育つ。



ヤマトシジミ

日本で平地に最も普通のシジミチョウの一種で、都会の庭先などでも見ることがができる。幼虫の食草はカタバミ。



ウラギンシジミ

裏面に白銀色の鱗粉がある。夏型は翅表中央部が橙色、秋型は青色。成虫で越冬し、翌春産卵し、夏型の個体が生まれる。幼虫の食草はフジ、クズなどのマメ科の花蕾、実、新芽などを食べる。



テングチョウ

頭部の先端が長く突き出て天狗の鼻の様な独特の形をしている。日本にはテングチョウ科はこの1種類のみ。幼虫の食樹はエノキ。



ダイヨウセセリ

雑木林の道ばたなどで普通に見られる。緑葉上に静止することが多い。翅を水平に広げてとまる。幼虫の食草はヤマノイモ、オニドコロなどのヤマイモ科。



イチモンジセセリ

稲の害虫。8月下旬から9月頃に個体数が増え、時に大発生し、空を真っ黒にするという。移動することがある。幼虫の食草はイネ、イヌムギなどのイネ科。



キマダラセセリ

春型は夏型に比べて大きい。立木をまじえた草地に多く、草花上で吸蜜する。幼虫の食草はエノコログサ、ススキなどのイネ科。

参考図書
学研昆虫図鑑 昆虫、白水隆 監修(1995)
日本の蝶、小樽山賢二ほか、山と溪谷社(1971)
採集・撮影・文：田淵武夫

奥の谷周辺の蝶

科名	No.	種名	学名	採集or撮影年月日	採集or撮影地
アゲハチョウ科	1	モンキアゲハ	<i>Papilio helenus nicconicolens</i> Butler	1989.9.10.	東条(写真)
	2	アゲハ	<i>Papilio xuthus</i> Linnaeus	2001.6.16.	奥の谷(採集)
	3	クロアゲハ	<i>Papilio protenor demetrius</i> Cramer	2001.7.14.	奥の谷(採集)
	4	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon nipponum</i> Fruhstorfer	2001.7.15.	奥の谷(採集)
	5	カラスアゲハ	<i>Papilio bianor dehaani</i> C.et R.Felder	2003.7.6.	奥の谷(採集)
	6	ナガサキアゲハ	<i>Papilio memnon thuubergii</i> von Siebold	2003.9.14.	奥の谷(採集)
ウラギンシジミ科	7	ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta paracuta</i> de Niceville	2001.10.8.	奥の谷(採集)
シジミチョウ科	8	ムラサキシジミ	<i>Narathura japonica</i> Murray	1989.9.10	錦織(写真)
	9	ゴイキシジミ	<i>Taraka hamada</i> Druce	1996.頃	奥の谷(写真)
	10	ツバメシジミ	<i>Everes argiades hellotia</i> Menetries	1997.4.13	奥の谷(採集)
	11	コツバメ	<i>Ahlbergia ferrea</i> Butler	2001.4.14.	奥の谷(採集)
	12	ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas damio</i> Seitz	2001.4.30	奥の谷(採集)
	13	ミズイロオナガシジミ	<i>Antigius attilia</i> Bremer	2001.6.10	奥の谷(採集)
	14	アカシジミ	<i>Japonica lutea</i> Hewitson	2001.6.16	奥の谷(採集)
	15	ルリシジミ	<i>Calastrina argiolus labonides</i> de l'Orza	2001.6.16	奥の谷(採集)
	16	ヤマトシジミ	<i>Zizeeria maha argia</i> Menetries	2002.3.30.	奥の谷(採集)
ジャノメチョウ科	17	ジャノメチョウ	<i>Minois dryas bpunctatus</i> Motschulsky	1993.9.5.	青山台(写真)
	18	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitchii</i> Menetries	1997.6.1.	奥の谷(採集)
	19	ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argas</i> Butler	2001.4.30.	奥の谷(採集)
	20	ヒカゲチョウ	<i>Lethe sicelis</i> Hewitson	2001.6.16.	奥の谷(採集)
	21	コジャノメ	<i>Mycalesis francisca perdiccas</i> Hewitson	2001.6.16.	奥の谷(採集)
	22	クロヒカゲ	<i>Lethe diana</i> Butler	2001.9.24.	奥の谷(採集)
シロチョウ科	23	モンキチョウ	<i>Colias erate poliographus</i> Motschulsky	1999.8.28.	奥の谷(採集)
	24	スジグロシロチョウ	<i>Pieris melete</i> Menetries	2001.4.14.	奥の谷(採集)
	25	ツマキチョウ	<i>Anthocharis scolymus</i> Butler	2001.4.14.	奥の谷(採集)
	26	キチョウ	<i>Eurema hecabe mandarina</i> de Porza	2001.4.8.	奥の谷(採集)
	27	モンシロチョウ	<i>Pieris rapae crucivora</i> Boisduval	2001.6.16.	奥の谷(採集)
セセリチョウ科	28	ダイミョウセセリ	<i>Daimio tethys</i> Menetries	2001.5.13.	奥の谷(採集)
	29	イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata</i> Bremer et Grey	2001.5.13.	奥の谷(採集)
	30	キマダラセセリ	<i>Potanthus flavum</i> Murray	2001.6.24.	奥の谷(採集)
タテハチョウ科	31	イチモンジチョウ	<i>Ladoga camilla japonica</i> Menetries	1997.5.10.	奥の谷(採集)
	32	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum</i> Linnaeus	1997.6.8.	奥の谷(採集)
	33	コムスジ	<i>Neptis sappho intermedia</i> W.B.Pryer	2001.5.13.	奥の谷(採集)
	34	アカタテハ	<i>Vanessa indica</i> Herbst	2001.6.16.	奥の谷(採集)
	35	ルリタテハ	<i>Kaniska canace no-japonicum</i> von Siebold	2001.8.17.	奥の谷(採集)
	36	ツマグロヒョウモン	<i>Arugyreus hyperbius</i> Linnaeus	2001.9.24.	奥の谷(採集)
	37	ヒメアカタテハ	<i>Vanessa cardui</i> Linnaeus	2001.9.24.	奥の谷(採集)
	38	アサマイチモンジ	<i>Ladoga glorifica</i> Fruhstorfer	2001.9.24.	奥の谷(採集)
	39	ミドリヒョウモン	<i>Argynnis paphia geisha</i> Hemming	2001.9.24.	奥の谷(採集)
	40	ゴマダラチョウ	<i>Hestina japonica</i> C. et R. Felder	2001.9.9.	奥の谷(採集)
	41	イシガキチョウ	<i>Cyrestis thyodamas mabella</i> Fruhstorfer	2002.6.1.	奥の谷(採集)
テングチョウ科	42	テングチョウ	<i>Libythea eclitlis celtoides</i> Fruhstorfer	2001.4.14.	奥の谷(採集)
マダラチョウ科	43	アサギマダラ	<i>Parantica sita nipponica</i> Moore	2001.10.14.	奥の谷(採集)

里山管理と生物多様性

神戸大学発達科学部 武田 義明

はじめに

人々は、これまで生きるために森林を切り開き、田畑を作り、食料を生産し、生活のための燃料として薪や炭を山林から採取し、水田の肥料として山林を伐採し、利用してきた。そのために、元の森林は破壊され、異なった森林が形成されてきたが、その過度の利用がはげ山をつくり、災害も引き起こすようになってきた。しかし、その一方で長期にわたる利用が新しい生態系を作り上げてきたのである。農業を営み、里山を利用することで形成された里山生態系である。田畑を開拓することによって草原が生まれ、水田を営むことによって水生生物の住みかが提供され、山林に手を入れることによって陽地性樹木が繁茂できるようになった。このように人間が多様な環境を作り出し、多様な生物が生息できるようになったのである。

里山の生態系は持続的な人間の利用があって成立しているのであるが、1960年代の燃料革命によって山林が利用されなくなって、それが崩れてきた。燃料が薪や炭から石炭、石油、電気になり、山の木を切る必要がなくなり放置されるようになった。そのため、森林は遷移が進み始め、元の常緑の照葉樹林に振り返りつつある。一見元に戻るのだから良さそうに見えるが、林が常緑樹林化するために林床が暗くなり、他の植物が生育できなくなり、多様性が低下してくるのである。農業形態の変化、特に基盤整備や農薬の使用により里山の生態系は大きく変わり、生物多様性も低下してきている。

世界的にも生物多様性の危機が叫ばれ、1992年にリオデジャネイロで行われた国連環境会議で条約が提唱された。日本もそれを批准し、1995年に「生物多様性国家戦略」が策定され、さらに2002年に「新生物多様性国家戦略」として改訂されており、生物多様性の保全の必要性が高まってきている（環境庁編 1996;環境省編 2003）。

植生遷移と種多様性

西日本地域の低地では、人間の影響を受ける前の林はシイやカシなどの照葉樹林であったと考えられている。これらの林はその地域の気候に適応した林であり、極相林と呼ばれる。そのような林が人間によって伐採され、その後再生してきた林は元の林と異なることが多い。それらを代償植生もしくは二次林とよんでいる。その代表的な林は、コナラ林やアカマツ林である。関西地方ではアカマツ林になることが多いが、関東地方ではコナラ林に、四国や九州ではシイやカシの二次林になることが多い。伐採の回数が増えると、再生が追いつかずはげ山になる。はげ山になってしまうと、植物の種数も少なくなり、生物多様性の低下が起こってくる（図1）。

このようなはげ山を放置すると遷移が進み、また、元のアカマツ林やコナラ林に戻っていく。林が回復してくると生物多様性も増してくるが、さらに遷移

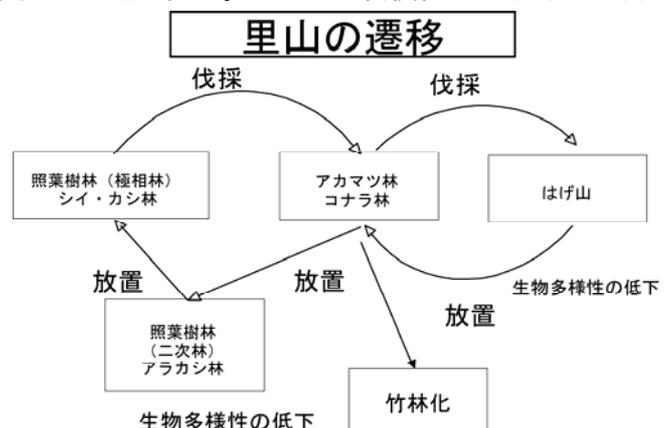


図1 里山の遷移と生物多様性

が進むと元の照葉樹林ではなくてアラカシを中心とした照葉樹林に変わっていく。この課程で、林床が暗くなり、今まで生育していた陽性のコバノミツバツツジなどのツツジ類や、ネジキ、カマツカなどが消えていき、多様性の

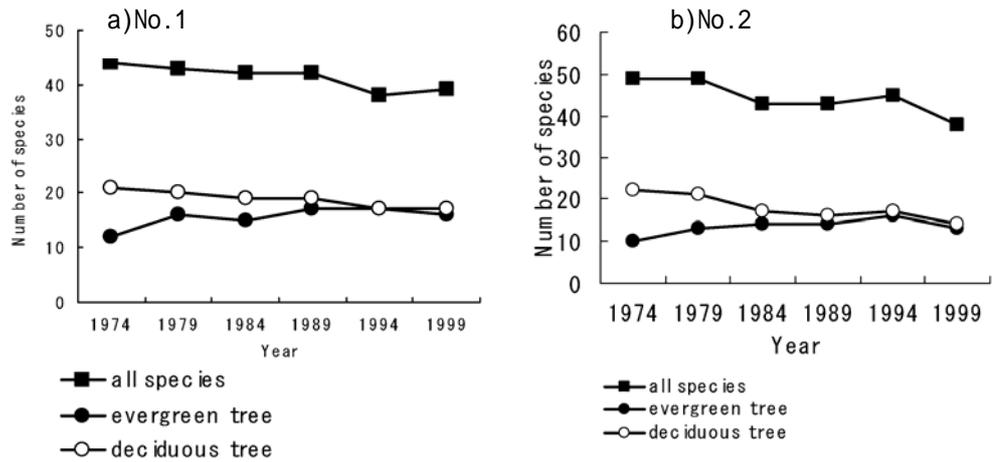


図2 神戸市再度山における永久方形区の出現種数の変遷

低下が起こる。また、元の照葉樹林を構成していた多くの種類は代償植生になった時点ですでに消滅しており、遷移が進んだからといってすぐには回復してこない。

神戸市では、再度山のマツ林内に1974年から永久方形区を設置し、5年ごとに調査している。それによると、現在では大部分のところでマツが枯れて、構成種の減少が認められている(図2-b)。まだマツが枯れていない場所(No.1)では、その減少が少ないことが示されている(図2-a)。しかし、常緑樹の種数も徐々に増えていることから遷移が進行していることがうかがえる(武田ほか 2001)。

もう一つの問題としては、竹林の拡大が上げられる。もともとタケノコの採取や竹材の利用、防災のために植えられていた竹が、それらの用途が減少するにつれて管理放棄されるようになった。そのために、竹林が周辺の林に侵入し拡大してきている。竹も常緑なので、竹林の林床には他の植物が生育しにくく、多様性の低下を招いている。

植生管理

多様性を保全するためには、遷移の進行を止め常緑化を防ぐ必要がある。これまでの伝統的な林の再生方法は10~15年ごとに皆伐して、遷移の初期の状態に戻し、そこから再生させるやり方である。これは樹高10m前後に抑えることから「低林管理」と呼ばれている。これに対して服部ほか(1995)は「高林管理」を推奨している。高林管理は落葉樹を残し、常緑樹を伐採する方法で、すべてを伐採しないために林は15~20mとなり、高林化する。高林管理の利点としては、伐採量が少なく、伐採した樹木の処理が簡単なことである。ボランティア等の少数で行う場合は、この方法が適していると思われる。また、景観が大きく変わらないことも利点である。しかし、欠点もある。常緑樹を伐採することで確かに林床は明るくなり、陽性植物がやや入りやすくなるが、すべてを伐採する低

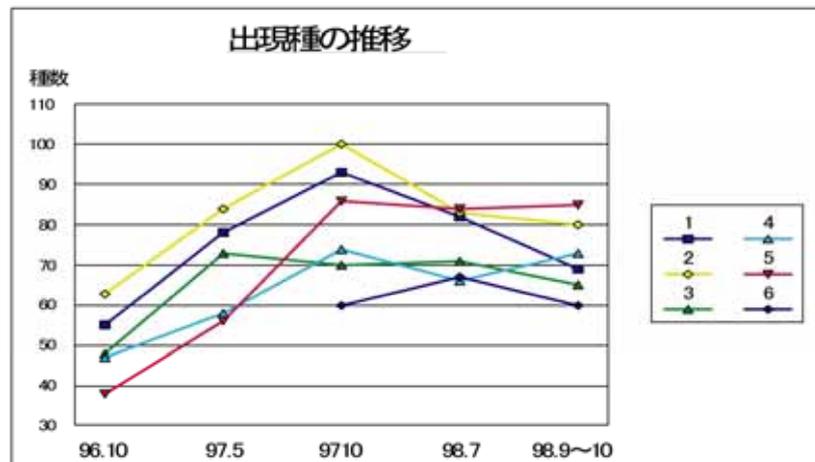


図3 神戸市しあわせの村におけるコナラ林管理後の種数変化
凡例の数字は調査区の番号を表す。

林管理ほどではない。図3は神戸市のしあわせの村で里山管理後の出現種数の推移である。それぞれ管理方法を変えて行っている。No.6は何も管理していないコントロールである。No.2は低林管理を行った調査区である。それ以外は高林管理を行っている。調査期間が2年と短かったので侵入した種がすべて定着するかどうかはわからないが、管理後、コントロール以外すべての調査区で種数は増加している。このことから植生管理が植物の種多様性に大きく影響していることが推測できる（大畑 未発表）。

生物多様性から見ると、多様な環境があった方が多様な生物を包含することができ、面積が広ければ、低林管理および高林



図4 神戸市しあわせの村の里山管理

管理の両方を行うことが良いと思われる。また、草原や湿地なども含むことができればいっそう多様性があがるものと考えられる。

里山管理の目標

里山の管理については、利用の仕方によって様々な管理方法が考えられる。まず、高林管理にするのか低林管理にするのか。高林管理にしても、それを服部ほか（1995）は(1)既存林放置型、(2)生物多様性保全型、(3)特定植物鑑賞型、(4)林床利用型に分けている。(1)は自然の遷移に任せるやり方で、いっさい手を加えない。(2)は常緑の低木を中心に伐採して林床を明るくし、多くの植物を保全する。(3)は特定の植物を残し、他を除去する。特に観賞用になるツジ類を残す。(4)は林内を自由に散策できるようにする。目的によっていずれかの管理方法を選択する必要がある。吹田市紫金山公園では(3)の方法でコバノミツバツツジの保全に取り組んでいる。しかし、そればかりでなく、(1)の放置地区も残すなど公園全体で分けし、管理している。



図5 吹田紫金山公園のコバノミツバツツジの開花

里山の保全・復元・創造のために

管理目標を立てるためには、その地域の生物の状況を知っておく必要がある。管理する場所だけでなく、その周辺地域まで含めて調査しておく事が求められる。特に、植生、フロラ（植物相）、動物、昆虫、鳥などの分布状況の把握が必要となる。しかし、全てを把握するためには相当の人力、経費がかかり、現実的でない。生態系の生産者として役割を担っている植生を把握する事によって、それに依存して生活している動物や昆虫なども大まかに推

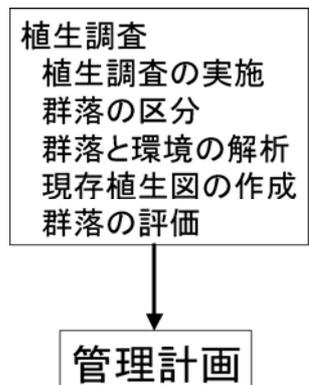


図6 植生調査と管理計画

測できると考えられる。また、指標となるような種を定めて調査する事も有効であろう。これらを把握する事によって、保全の対象となる植生や種および目標を定め、管理計画を立てる事が出来る。もちろん、人々の利用形態なども考慮する必要があるだろう。

植生調査においては、調査した資料を基に群落を区分し、それと環境との関係を解析をする。さらに、区分された群落を地図上に現存植生図として描く。これによって、群落の広がりや配置を把握し、群落の評価を行う。これらを基に管理計画を立てるのが望ましい。

これからの里山

里山管理は何も昔の里山風景を取り戻すために行うのではない。里山はこれまで、生産林として利用されてきたが、その役目は終わったので価値がなくなった訳ではない。私たちの環境を守るためにまた、生物の保全のために重要である。したがって、これからは環境林として活用していくべきである。また住民相互のコミュニケーションが希薄になっている昨今、それを形成する場として利用できる。さらに、次の世代を担う子どもたちのために環境教育の場として活用していくべきであろう。

里山管理の体制

里山管理を行うにあたっては、よほど条件が整わなければ、全てをボランティア団体で行うことは困難である。管理を行う里山の土地所有者や立木権所有者との交渉、資金の調達、管理計画の策定、地域住民へのアピール、環境教育など地域の行政、NPO 団体、学識経験者などとの協働を行うことによってより容易に行えると思われる。また、各種団体との調整ができるコーディネータがいれば、なお、円滑に活動できるものと考えられる。

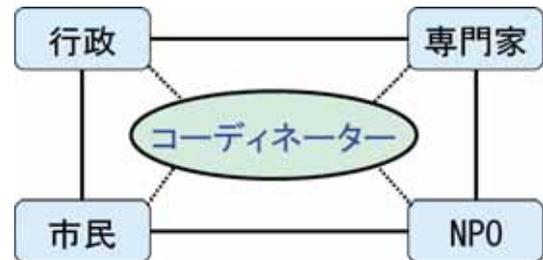


図7 里山管理の体制

引用文献

- 服部保・赤松弘治・武田義明・小館誓治・上南木昭春・山崎寛．1995．里山の現状と里山管理．人と自然，6:1-32．
- 環境庁編．1996．生物多様性国家戦略．大蔵省印刷局．東京．
- 環境省編．2003．新・生物多様性国家戦略．ぎょうせい．東京．
- 大畑 敦．未発表．里山の管理方法と種多様性に関する研究．神戸大学発達科学部卒業論文．
- 武田義明・八木健爾・西岡喜世・藤本眞吾・小館誠治．2001．再度山永久植生保存区における植物群落の遷移に関する研究．再度山永久植生保存地調査報告書第6回，9-86．神戸市建設局公園砂防部．神戸．

錦織公園草花歳時記そしてレッドデータ植物について

錦織公園自然友の会 浅野晴也

錦織公園草花歳時記

錦織公園とその周辺の田畑に四季おりおりに咲くかわいい草花たちについてまず少しお話ししたいと思います。

春は花の季節です。錦織公園の春は樹ではアオモジ、草花ではショウジョウバカマヤシロンラン、スミレたちが咲くことから始まります。スミレたちは、3月中ごろから一月余りの間に、コスミレ、シハイスミレ、ヒメスミレ、タチツボスミレ、ニオイタチツボスミレ、ノジスミレ、アリアケスミレ、スミレ、フモトスミレ、ツボスミレの10種類が競うように次々と咲いていきます。そして同じように、キジムシロ、タガラシ、レンゲ、ハコベ、コオニタビラコ、ノミノフスマ、チゴユリ、キランソウ、タンポポ、タネツケバナ、ヒメウズ、カラスノエンドウ、ウマノアシガタ、ゲンノショウコ、クサイチゴ、ムラサキサキゴケ、キツネノボタンなどたくさんの野草たちが一斉に花を開いて行きます。

4月も終わり5月になると、キンランが咲き始めます。一本のキンランが咲くだけで薄暗い雑木林の中が少し華やいだ雰囲気になるのが不思議です。その他にもオオジシバリ、ミヤコグサ、ヘビイチゴ、ニワゼキショウ、ニガナ、チガヤ、コバンソウ、ナワシロイチゴ、ノアザミ、などが咲いてゆきます。

昨年(2002年)の6月2日にはもうカブトムシが見られました。もう初夏の装いです。6月にはササユリやホタルブクロ、ウツボグサ、タツナミソウ、ネジバナやコモウセンゴケ、オオバノトンボソウ、オカトラノオなどの花が見られます。

7,8月の盛夏になると花の数は少なくなり、園内も静かな感じがします。彼らもちょっと一休みしているのでしょうか。それでもセリやメハジキ、キキョウやニガクサ、センニンソウやコクラン、コケオトギリやキツネノマゴ、ノアズキやヌマトラノオなどが咲き、ため池ではガガブタもそのレースの飾りをつけたような花を見せてくれます。

秋になるとまた秋の草花たちでにぎわってきます。9月10月には、ナンバンギセル、アカバナ、ヤブマメ、ノササゲ、アキノタムラソウ、ツリガネニンジン、ワレモコウ、ネコハギ、ツルボ、オギノツメ、ヒヨドリジョウゴ、キンミズヒキ、オトギリソウ、オケラ、ヤマハッカ、オミナエシ、ヨメナ、ミゾソバ、コウヤボウキ、ヤノネグサ、イヌタデ、アキノキリンソウ、アキノノゲシ、ツルリンドウ、シラヤマギク、ヒヨドリバナなどが咲き、去り行く秋を謳歌しているようです。

11月になると、リュウノウギクやセンブリ、リンドウがその美しい姿を見せてくれます。そしてこれらの花が咲き終わると秋も深まって行き、錦織公園の花の季節は終わりを迎えます。次の春までの間彼らは休息し、錦織公園はもっとも静かな季節を迎えます。



スミレ



コスミレ



シハイスミレ



ノジスミレ



ヒメスミレ



タチツボスミレ



フモトスミレ



ニオイタチツボスミレ



ツボスミレ



アリアケスミレ (赤色、白色)

錦織公園のレッドデータ植物について

さて、皆さんはレッドデータブックという本をご存知でしょうか？絶滅の危機に瀕している生物たちの種類が載っている本です。環境庁は国のレッドデータブックを出し、大阪府は大阪府のレッドデータブックを出しています。また近畿地方のレッドデータブックもあります。これらの本に載っている植物たちがレッドデータ植物です。これらの植物たちは、生息地の破壊や、園芸採取や盗掘、またライフスタイルの変化による里山里地の管理不足などの理由によって絶滅の危機に瀕しています。

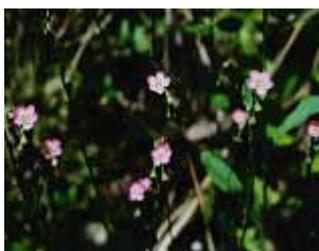
草花歳時記のところで書いたキンランやキキョウ、ガガブタ、オケラ、コモウセンゴケも

レッドデータ植物です。錦織公園にはその他にもレッドデータ植物たちが生息しています。私の確認したところでは、イシモチソウ、ケヤマウコギ、ミソナオシ、ミヤコアザミ、ムカゴニンジン、そしてついこの間2003年10月にはタヌキマメも見ることができました。この中でもミヤコアザミは、大阪府のレッドデータブックではすでに「絶滅」と書かれているとても希少な植物です。かろうじて園内で生き残っていました。私たちが間伐することによって、毎年花を咲かせてくれています。

しかし2003年度より、大阪府から大阪府公園協会へ錦織公園の管理が移されたことから、私たち「錦織公園自然友の会」の活動が今までどうり自由にできなくなり、園内の里山間伐もできなくなりました。ネザサや常緑樹などを刈り取り、里山の手入れをすることを私たちは里山間伐と呼んでいます。私たちは公園協会側と何度か話し合いの機会を持ち、今まで通りの活動を認めてほしいと申し入れてきましたが、聞き入れてもらえませんでした。

錦織公園のレッドデータ植物たちは、人の手が適度に入らないと生きてゆけない里地里山の植物たちがほとんどです。公園管理者がこれらの植物たちを保全してくれればいいのですが、多分彼らはそれがどこに生えているのかや、その植物のことさえよく知らないと思います。私たちは微力ながらも里山間伐をとおして、これらのレッドデータ植物の保全に寄与してきたと思っています。これからこれらの植物たちは衰退して行くだろうと私たちは心配しています。

以上、錦織公園の草花たちについて書いてきましたが、樹木やキノコ、昆虫たちについてはまた別の機会に譲りたいと思います。興味ある方は錦織公園自然友の会の会報「にしこうり」に私が連載している「錦織公園生きもの歳時記」をごらんください。



コモウセンゴケ



ミヤコアザミ



オケラ



ミソナオシ



ムカゴニンジン



ガガブタ



キキョウ



タヌキマメ



イシモチソウ



キンラン



ケヤマウコギ

奥の谷モデル地区の将来プラン

～ H15 年度「自然環境保全活用調査その2」報告書より抜粋～

(1) 隣接する南原地区の保全活用方針

放棄田跡に見られる特徴的な植生

南原地区は、谷全体が農地としての機能をなくしてから十数年経っていると思われ、放棄田跡の一枚ごと、また数箇所のため池ごとに異なる植生が、それぞれの微妙な環境に即して見られる点が特徴となっている。タツナミソウやカサスゲ、ダイコンソウ、ハンノキ林など奥の谷や嶽山周辺であまり見られない植物も生育しており、谷全体の環境保全が求められる。

湿地や草地の保全・観察地としての活用

カサスゲの湿地より上流部は、放棄田跡ごとの特徴がよくわかる見本園的な様相となっており、現在も農地として利用されている奥の谷と対照的な草地や湿地を観察することができる。ササユリが見られるスギ・ヒノキ林も含めて、奥の谷と南原とを結ぶ観察路などを整備することで、多様な湿地や草地の自然の保全・観察地として活用ができると考えられる。

草原性の花々が見られた畦道

谷の入口であるため比較的明るい畦道となっており、周辺には様々な草原性の植物が見られた。特にタツナミソウは、嶽山周辺では今のところここで見つかっていない。



カサスゲの湿地とヌマトラノオ

放棄田がカサスゲの湿地となり、かつての畦道沿いにヌマトラノオの群落やダイコンソウが見られた。カサスゲは嶽山周辺ではここにしか見られない。



カサスゲ



ヌマトラノオ



ダイコンソウ

ため池 B とスギ植林地

スギの植林地に囲まれたため池。池の水辺にはショウブが生育している。



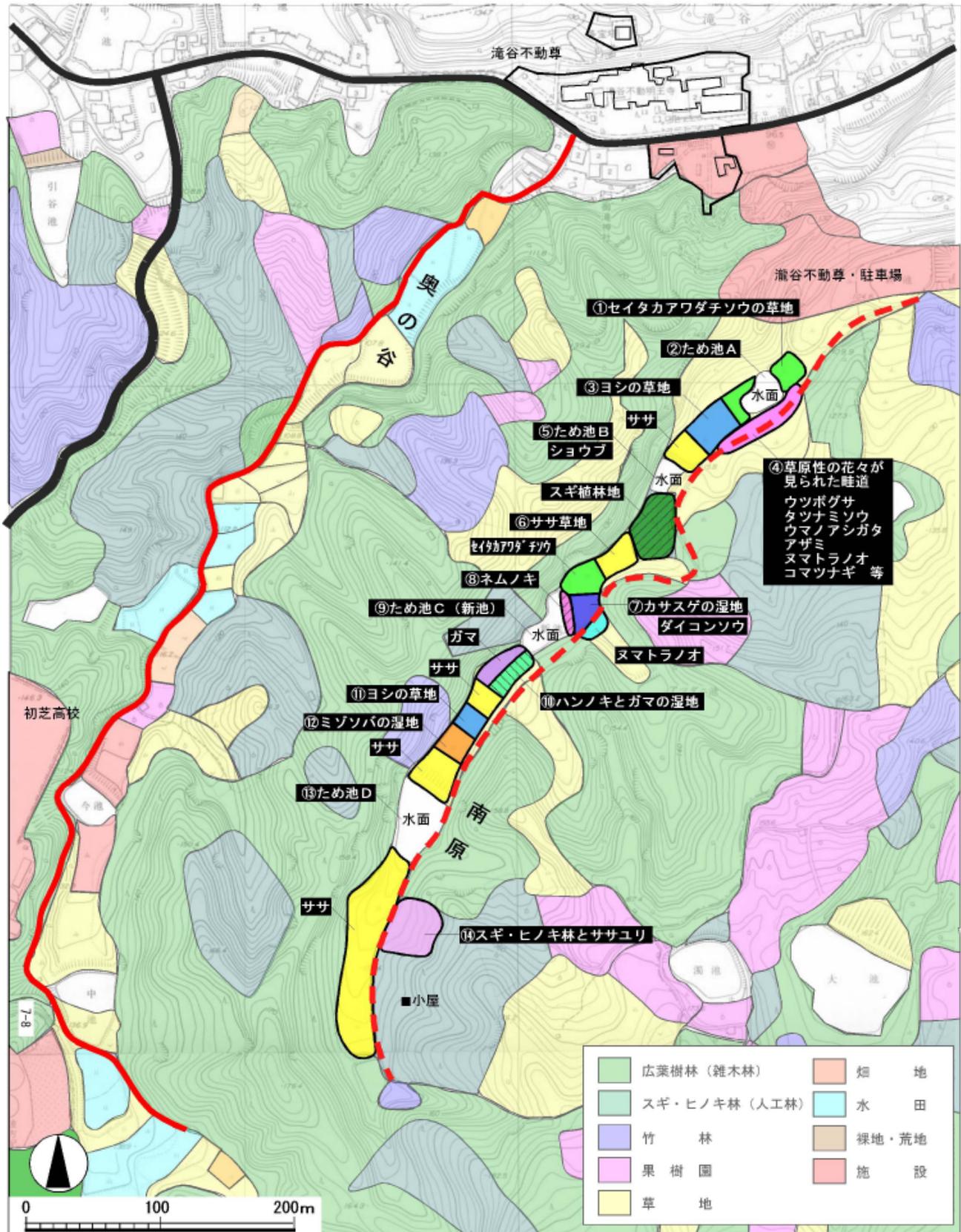
ショウブ

スギ・ヒノキ林とササユリ

比較的手入れがされて明るく、シダが生育するスギ・ヒノキ林の林床に、ササユリが見られる。花が咲いている個体だけで20輪近くが数えられ、嶽山周辺でもっともササユリの密度の高い場所のひとつと思われる。



南原地区 現況図 (2003. 6月～7月調査)



(2) 自然観察路の整備方針

自然観察の資源

奥の谷の里山管理地や、南原の湿地・草地などが自然観察の主な対象となるが、それ以外にもモデル地区内には次のような資源がある。

見晴らし良好な展望地

奥の谷と南原を分ける尾根の突端部は、滝谷不動尊の仏塔や金剛・葛城山系を見晴らすことができる良好な展望地となっている。現在は道が通っておらず通行不可能な藪になっているが、数十mを整備できれば既存の踏み分け道とむすぶことができる。



滝谷不動尊に関連する石塔

南原の谷の最奥部には、滝谷不動尊に関連すると思われる石塔がある。由来については今後調査する必要があるが、この地の歴史文化的な経緯をさぐる上で大事な史跡と考えられる。

南原の耕作放棄に伴って、現在はここに通じる明瞭な道がない状況にあるが、南原の道を整備すれば容易に到達することができる。



奥の谷古墳群

奥の谷の西側尾根部には「奥ノ谷古墳群」があり、3基の古墳の存在が明らかになっている。そのうちの1号墳については1983年に教育委員会による試掘調査が行なわれ、次のようなことがわかっている。(大阪府教育委員会「奥ノ谷古墳発掘調査概要」より)

- ・長径20m、短径14.5m、墳高2mの楕円形墳丘をもつ。
- ・木棺直葬の埋蔵施設と須恵器製の杯と蓋が出土。
- ・7世紀代の古墳で、従来に見られない立地にある。

古墳群の場所は、里山管理地の「NICEな森2003」の上部にあたっているため、今後は史跡を壊さないような配慮とともに、自然観察路の一環としての資源活用を行なうことで、より魅力的な観察ルートを設定することができる。



自然観察路のコース設定（案）

現況道の踏査結果から、自然観察路のコースとしては、次のようなルート設定が考えられる。ルート設定においては、モデル地区を訪れた人が体力や時間にあわせてスムーズに自然観察を行なえるよう、複数の周回コースを設けた。また、コースごとに観察する対象の特色をもたせるように留意した（図「自然観察路コース(案)」参照）。

ただし、これらの自然観察路の設定にあたっては、土地所有者の了解を得て整備と管理を行なう必要がある。

周回コースA ～雑木林を巡る道～

里山保全活動で手入れされた明るい雑木林を巡るコース。また最短距離で、奥の谷の見所（水の生きもの池～草地管理地～活動拠点～果樹の丘～雑木林～ツツジの尾根～展望地）をまわることの出来る道でもある。



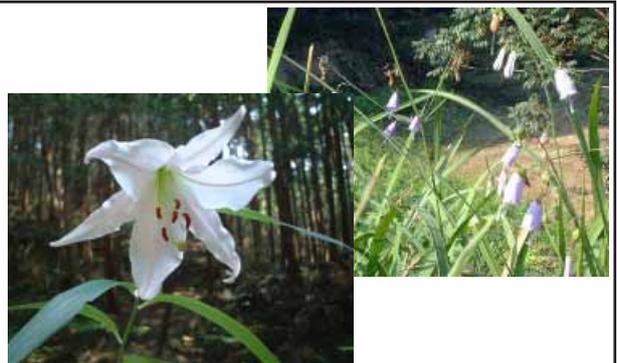
周回コースB ～NICEな森を巡る道～

国際ワークキャンプで整備したNICEな森を巡るコース。2000年から始まった人工林の管理地について、林分ごとの下層植生の違いや年度ごとの植生変化を観察しながら散策することが出来る。



奥の谷・南原一周コース

地区全体を一周して奥の谷と南原の概要をつかむコース。もっとも長距離のルートだが、季節を選べば、奥の谷のツリガネニンジンや、南原のササユリなど様々な植物をそれぞれの環境を比較しながら観察することが出来る。



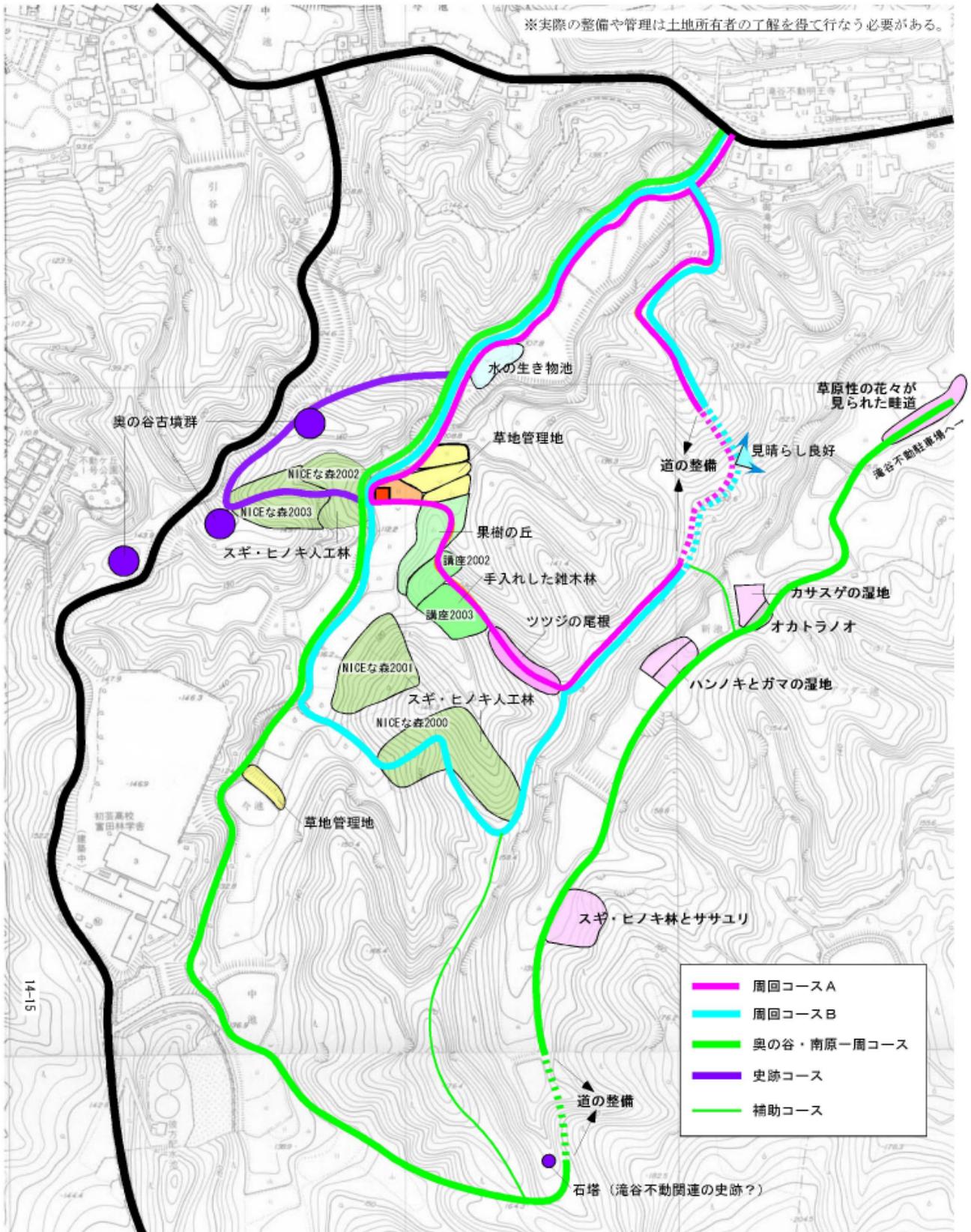
史跡コース

奥ノ谷古墳群の史跡をたどるコース。NICEな森の管理とあわせて整備を行い、初芝高校に至る車道と連絡することで、将来的には周辺地域の他の古墳群へとつなぐ史跡のネットワークルートとすることも考えられる。

補助コース

長距離の奥の谷・南原一周コースからのエスケープルートとして、また周回コースA・Bからの延長ルートとして設定し、各ルートの自由度を高める。奥の谷の尾根上と南原の谷部を直接結ぶルートは、安全性を高めるための階段等の整備が必要である。

奥の谷モデル地区 自然観察路コース（案）



協議会参加団体の活動紹介

錦織公園自然友の会

「錦織公園自然友の会」は、大阪府営「錦織公園」での各種イベントを中心に、有志による別組織の「竜泉里山クラブ」で、竹林管理作業と竹炭焼き作業を行っております。

「錦織公園自然友の会」 平成8年4月発足 会員数80名
大阪府営錦織公園にて自然観察会、手作り工作や昔遊び、紙芝居、里山間伐体験会、学校の先生に遠足下見ガイドなどを行っています。公園外での出前ボランティア活動も行っています。

・連絡先 電話0721(29)5043 松原 安茂



「竜泉里山クラブ」 平成10年発足 会員数25名
千早赤阪村小吹にて竹林の間伐育成作業、竹の子の収穫などを行っています。嶽山竜泉地区にて竹炭焼きを行っております。ほとんど廃品利用による手作りの炭焼き小屋です。屋根からの雨水利用や太陽光発電、風力発電も試みています。現在土窯に挑戦中で菊炭やアート炭を焼く予定です。葛城・金剛の山々が見渡せる素敵なおところです。仲間を募集中、特に女性の見学を歓迎しています。

(活動日 毎週水曜日と第1・3・5土曜日 9:30~)

・連絡先 電話072(294)0855 肥後 延年
電話072(366)0995 藤田 貞夫

富田林の自然を守る会

富田林の自然を守る会は、富田林の自然を守る市民運動協議会主催の「自然環境の観察会」や、「里山管理作業(里山ホリデー)」の各種行事をサポートしてきました。

2003年度の独自の活動には、国際ワークキャンプの活動拠点となる宿泊施設作りや、新年の餅つき・どんど焼き行事があります。次に紹介します。

国際ワークキャンプの活動拠点となる宿泊施設作り(2003年4月~7月)

かつてミカンを貯蔵していた小屋を、炊事・宿泊できるように改修しました。床張りや構造柱の補強、窓のサッシ・ドアの取り付けを大工さんをお願いし、その他は、建築士さんや多くの方々のアドバイスや協力で、もちろんNICEの若い力も加わって、なんとか生活できるように改修が出来ました。具体的には、屋根瓦の点検、雨樋取り付け、外壁を取り払い開口部作り、土間にコンクリートを流し、流し台を設置し、排水路も整備する。配線工事し照明器具取り付ける。網戸の取り付け、井戸枠を利用した囲炉裏作り等々です。見違えるほど快適な空間が生まれましたよ。



小屋のコンクリートはり

新年餅つき・どんど焼き(1月18日(日))

正月の門松・注連飾り等を燃やし、その火でもちを焼いたり、書初めを燃やしたり、親子で楽しむ昔ながらの伝統行事(どんど焼き)を奥の谷で行いました。また、その場でみんなで餅つきをし、きな粉やあんこ、大根おろしで食べました。準備は大変ですが、定例行事にしたいと思います。



どんど焼き

連絡先：田淵武夫 〒584-0024 富田林市若松町4丁目16-21 TEL/FAX 0721-24-7960

特定非営利活動法人 里山倶楽部

里山倶楽部は、「好きなことして、そこそこ儲けて、いい里山をつくる」をコンセプトとして、里山の保全管理や環境教育に関するさまざまな事業を行なっています。会員は約350名。毎月1回の定例活動日の他に、次のような活動があります。その中の「とんびくらぶ」では、龍泉寺近くの果樹園で里山初心者が楽しみながら草刈りなどの手入れや果物の収穫などを行なっています。



炭の生産販売もしています

連続講座

里山の学校（里山基礎講座） 森林ゼミ（人工林管理） 里林班（雑木林管理）

窯の穴（炭焼師養成講座） 弘川千年の森（行政との協働事業） 里山キッズクラブ（子

供対象）

自由参加活動

とんびくらぶ（山遊び・山仕事体験）

タントンハン（無農薬米作り）

森のキッチン（森の料理とクラフト）

かぼちゃ倶楽部（有機農業のお話と里山談義）

まちづくり・研究活動

ちゃこマネー委員会（炭本位制の地域通貨）

里山バイオマス研究会（薪炭林のI初キ[®]-化研究）

企画運営・コンサル事業

里山環境教育オフィス（ワークショップ[®]等の受託事業）

ど組（森林作業請負、炭・薪販売）

連絡先：寺川裕子，〒584-0024 富田林市若松町4-20-6，TEL/FAX 0721-25-3128

石川あすかプランを考える市民連絡会

本市民連絡会は、石川の自然環境を守ることを目的として1994年に発足しました。1999年からは市民と行政が協働して石川の整備のあり方考える「石川河川公園自然ゾーンワークショップ」に参加し、さまざまな活動を行なっています。

活動の内容

1. 「あすかプラン」の見直しを府に要望する：「石川あすかプラン」を見直し、環境保全・自然保護の観点を大きく取り入れるよう、大阪府及び関係市町村に要望する。
2. 河川管理のあり方を学習する：河川管理のあり方や自然環境保全などについて学習する。
3. 生物調査に基づき提言する：石川に生息する生物の調査を行い、石川の自然保護について提言する。
4. 周辺住民の意見を聞く：石川周辺住民をはじめ、多くの人々の意見を聞き、暮らしを考え、自然を守る立場から、要望や提言に反映させる。
5. 市民参加のあり方を研究する：市民が参加できる河川公園のあり方について研究する。
6. 多くの人に賛同を呼びかける：より多くの人々に、私たちの考えを宣伝し、賛同を呼びかける。

今年は新しく「石川自然クラブ」が発足し、生きもの班、地形・水班、石川こども自然隊などのグループで、石川を学び、石川で遊び、石川の自然を守り育てる活動を展開しています。

石川河川敷でのバードウォッチング



連絡先：笠原英俊，〒584-0086 富田林市津々山台1-5-1，TEL/FAX 0721-29-7894

富田林勤労者山岳会「嶽の会」

*富田林の自然を守る市民運動協議会に参加する団体としての活動

- 1) 7月5日(土) 奥の谷、自然観察路の清掃・草刈作業、 (8名参加)
- 2) 12月6日(土) 奥の谷作業小屋周辺の清掃及び雑木林の片付け、薪作り (10名参加)

*会独自の山行

- 1) 宿泊(テント泊)を伴うもの山行・・・6回実施
九重山(5月)、大日三山(北ア・7月)、山伏岳(11月)、武奈ヶ岳(2月)、八ヶ岳(3月)など
- 2) 夜行日帰り等ハイキング・・・7回実施
取立山(5月)、金剛山・清掃登山(6月)、芦生原生林(10月)、尼が岳(1月)など



写真は12月6日の作業日の様子
自然保護担当：上角 敦彦
連絡先：0721-24-8757



NICE

1. 2003年の国際ワークキャンプ

国際ワークキャンプとは、世界の若者が2～3週間一緒に生活しながら、地域の住民と環境保護・福祉・農村開発等に取り組む、国際ボランティア事業です。



2003の参加者

富田林では、1999年から毎年夏に実施し、2003年度で5年目を無事終えることができました。03年度は、7月26日～8月9日で行い(7月26日～31日は、太子町で作業したため、実際には8月1～9日) 全日程参加11人(日本人5、アメリカ2、イギリス1、韓国1、スペイン2)・部分参加13人・住民約175人が参加し、里山整備の作業等に取り組みました。

また、ワーク以外の活動として、ホームステイ(5軒に分かれて)、座談会(参加者でテーマは自然について)、PL花火鑑賞、滝谷不動尊見物、交流会等を行いました。今までとは大きく違うのは、03年夏に完成したばかりの宿泊施設・みかん小屋がすぐ近くにあることです。地元の方々に車を出してもらい負担が小さくなり、移動のロスも減り、本当に良かったです。

最後には台風が近づき、地主の石垣さん邸に避難させて頂くためにお邪魔するというハプニングもありましたが、大きなケガもなく、無事に終えることができたのは、「富田林の自然を守る会」を初め、協議会や地元の皆さんのおかげです。2004年度の国際ワークキャンプも、もう日程が決定しました。今年もどうぞ、よろしくお願い致します。

2. 2003年度全体を通して

03年度全体を通して感じることは、NICEの中でも、より富田林ファンが増え、運営体制が整ってきたということです。03年度の週末ワークキャンプは、1/12,26, 2/9,23, 3/8-9,16, 4/12-13, 5/31-6/1, 6/8, 6/14-15, 9/27-28, 10/25, 11/9, 12/7, 12/20の15回実施し、延べ約120人が参加しました。このように、地道な活動を通じてこそ、富田林という名前が徐々に全国・全世界へ広がっていき、これからは多くのファンを新しく作り続けて行けると信じています。2004年度に入り、NICEとしてできることを最大限に活かそうと、数回のミーティングを開き、様々な可能性を話し合っています。これからも、より多くの人々を巻き込み、豊かな自然を後世に残して行きたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。



間伐作業

連絡先：初田裕美 NICE 関西事務局
TEL 06-6462-1848
e-mail west@nicel.gr.jp

2003年度 里山管理ボランティア養成講座 受講者の感想

富田林の自然を守る市民運動協議会は、今年度も、里山を保全する人材を育てることを目的に“里山を知る・学ぶ・体験する”“ふるさとの里山づくりをあなたの手で”をキャッチフレーズに、里山管理ボランティア養成講座を実施しました。今年度は「実践編」として、主に現地での作業を中心に行いました(講座の内容はp.37参照)。講座は2003年10月～2004年2月に5回実施、18人が受講しました。受講者の方々から下記の感想が寄せられました。



スギ・ヒノキ林の間伐
実習風景

昨年に比べ景色が「里山だぁ！」

昨年に続き今回の実践編に参加させて頂き、まず感じた事は昨年見た景色と比べて全体の風景が「里山だぁ！」という印象を受けました。これも役員の皆様を始めボランティアの皆さんの熱意と努力によるものと思います。私も今後時間のゆるすかぎり参加させて頂きたいと思います。
(伊藤十三男)

里山の現況にビックリ

林業が自立出来なくなって里山が荒れている現況、美しい田が、足の踏み込めない笹の似密林に！ビックリしました。小生の田舎も草茫々の田畑、近隣の畑の持主が、草の種が飛んで来るので年1～2回田畑の維持に大変です。
(谷光男)

実績ある中での実技よかった

『「里山とは」何んぞや』の講座(第1回目)をもう少し時間をとって説明してほしかった。2回目以降は、実技に移ったので、実績もあるなかでよかった。1月の雪は、ひさしぶりに積もりよかった。
(三嶋富士夫)

汗を流して自然を体験するすばらしさ

日頃から自然環境保全などに興味があり様々な勉強会に参加してきました。今までは座学で学ぶことが多かったため実際に現場でどのような活動が行われているか分かりませんでした。今回このような活動に参加し、あせを流し、体を動かしながら自然を体験することの素晴らしさを知ることができました。
(三澤具主)

多くの人の知恵と力で、荒地がきれいにスタッフの方達には、本当に頭が下がる思いがしました。心から感謝申し上げます。有り難うございました。多くの人を知恵と力を出し合うことで、荒地がみるみるきれいになることを実感しました。奥の谷モデル地区の将来プランを聞いていると夢のようでした。土地所有者、行政、ボランティアが一体となって、美しい里山が復元できたらと思っていました。奥の谷のようなところがいっぱい増えていけばと思います。
(石原八束)

毎回いろんな活動ができ楽しかった
里山管理について、大切さは良くわかっているのだが、どこから入れるかを模索していた。この講座に参加して、毎回いろいろな活動ができ楽しかった。ありがとうございました。
(西端美和子)

竹炭作りで思い出作り

竹炭作りをしたいとおもい参加したが、なかなか簡単にはいかないと思うが何度も失敗しながら仲間と苦労しながら思い出作りをする。
(池田勲)

里山と人とのつながり知った

この講座に参加して初めて里山と人とのつながりを知り、今現在の里山の状態を教えていただき、今のままでは里山の放置が多くなり、人や生き物にやさしい里山がなくなりつつあることで大変心配です。この大切な里山を守る様に何か活動していきたく思いました。
(奥村 勉)

若い人から元気もらった

1回目2回目養成講座に参加し、2回目の実習と勉強でき良かったです。若い人と交わってできたこと若さもらい元気でやる気ができました。
(山下清一)

平成15年度 富田林の自然を守る市民運動協議会 事業報告書

◆役員会

- 4月14日(水)午後7時～9時 904会議室
参加者7人 内容 傷害保険(年間行事)加入、
年間活動計画(里山管理作業、自然観察会、里山環境講座、国際ワークキャンプ、自然環境保全活用調査、里山管理ボランティア養成講座、冊子「富田林の自然」の発行)
- 5月14日(水)午後7時～9時 904会議室
参加者7人 内容 活動報告と計画、自然環境保全活用調査委託契約内容
- 6月16日(月)午後7時～9時 904会議室
参加者6人 内容 活動報告と計画
- 7月15日(火)午後7時～9時 904会議室
参加者5人 内容 活動報告と計画
- 8月12日(火)午後7時～9時 905会議室
参加者6人 内容 活動報告と計画
- 9月17日(水)午後7時～9時 904会議室
参加者6人 内容 活動報告と計画
- 10月15日(水)午後7時～9時 904会議室
参加者6人 内容 活動報告と計画、森林ボランティア保険加入
- 11月19日(水)午後7時～9時 904会議室
参加者5人 内容 活動報告と計画
- 12月17日(水)午後7時～9時 904会議室
参加者5人 内容 活動報告と計画
- 1月14日(水)午後7時～9時 904会議室
参加者5人 内容 活動報告と計画
- 2月18日(水)午後7時～9時 905会議室
参加者6人 内容 活動報告と計画、自然環境保全活用調査概要報告
- 3月17日(水)午後7時～9時 904会議室
参加者5人 内容 活動報告と計画・富田林の自然、総会議案書



早朝の奥の谷(2003.5.)



マルバウツギ(2003.5.)

◆愛パークフェスタ

- 4月29日(祝)錦織公園
参加者400人 事業内容 工作・クイズラリー等

◆生きもの水辺づくり

- 6月1日(日)午前10時～午後3時 奥の谷
参加者33人 事業内容 メダカ取り、小屋改修

◆自然観察路の整備

- 7月5日(土)午前10時～午後3時 奥の谷
参加者16人 事業内容 草刈・竹きり・枝はらい

◆里山管理作業 「富田林里山ホリデー」



田の畦に咲いたツリガネニンジン(2003.10.)

- 5月24日(土)午前10時~午後3時 奥の谷
参加者26人 事業内容 果樹の丘と生きもの水
辺の除草、小屋改修
- 6月21日(土)午前10時~午後3時 奥の谷
参加者 9人 事業内容 田の草刈、池の草刈、
小屋改修
- 8月30日(土)午前10時~午後3時 奥の谷
中止
- 9月27日(土)午前10時~午後3時 奥の谷
参加者 7人 事業内容 小屋改修、間伐作業、
N I C E の合宿と合流
- 10月25日(土)午前10時~午後3時 奥の谷
参加者34人 事業内容 小屋改修、笹刈り、N
I C E の合宿と合流

- 11月9日(日)午前10時~午後3時 奥の谷
中止
- 12月7日(日)午前10時~午後3時 奥の谷
参加者 5人 事業内容 小屋修理、雑木林の倒木処理
- 1月10日(土)午前10時~午後3時 奥の谷
参加者14人 事業内容 椎茸のほだ木づくり、コナラの伐採、玉切り
- 2月14日(土)午前10時~午後3時 奥の谷
参加者13人 事業内容 休耕田の草刈
- 3月13日(土)午前10時~午後3時 奥の谷
参加者32人 事業内容 椎茸の植菌

◆自然環境の観察会について

- 4月6日(日)嶽山自然観察会 午前10時~午後3時 嶽山
参加者21人 事業内容 草花観察
- 5月11日(日)自然観察会 午前10時~午後3時 南原
雨天中止
- 6月8日(日)自然観察会 午前10時~午後3時 南原
参加者11人 事業内容 南原の植生観察
- 7月12日(土)昆虫ウォッチング 午後3時~午後9時 奥の谷
雨天中止
- 9月14日(日)自然観察会 午前10時~午後3時
奥の谷
参加者 9人 事業内容 滝谷公園~奥の谷など
- 9月21日(日)自然観察会 午前10時~午後3時
奥の谷
雨天中止
- 10月12日(日)自然観察会 午前10時~午後3時
奥の谷
参加者 6人 事業内容 滝谷不動尊~奥の谷~初
芝ログハウスなど



自然観察会(2001.5.)

◆国際ワークキャンプへの参加

7月26日～30日太子町、7月30日～8月9日富田林市
参加者11人 事業内容 NICEな森の間伐作業など

◆平成14年度里山管理ボランティア養成講座 受講者のOB会

5月24日(土)午前10時～3時 奥の谷
参加者 4人 事業内容 作業と交流



ウツギ(2003.5.)

◆里山環境の講座について

4月29日(祝)春の野草を食べる会 午前10時～3時 奥の谷
参加者47人 事業報告 ヨモギだんご、ヨナメごはん、セリのおひたし等

② 8月17日(日)手作り工作 午前10時～3時 錦織公園
中止

③ 11月22日(日)自然クラフト 午前10時～3時 奥の谷

◆里山管理ボランティア養成講座の内容、つる細川が受講しました。

日 時	内 容		備 考
10月 26日 (日)	午前10時～12時 里山管理と生物多様性 講師：武田義明 (神戸大学発達科学部助教授) 場所：市役所902会議室	午後1時～3時 植生調査 場所：彼方(奥の谷)	弁当・水筒等持参
11月 29日 (土)	午前10時～午後4時 竹炭焼き 講師：錦織公園自然友の会 場所：嶽山中腹 午後6時～9時 交流会(夕食を含む) 場所：ふたば別館		弁当・水筒等持参 ふたば別館に宿泊 (夕・朝・昼食付)
11月 30日 (日)	午前8時～10時 竹炭焼き 場所：嶽山中腹	午前10時～午後3時 スギ・ヒノキ林の間伐・枝打ち 場所：彼方(奥の谷)	宿泊費・交流会費等は 別途徴収
12月 14日 (日)	午前10時～午後3時 雑木林の間伐・下刈り・観察路づくり 場所：彼方(奥の谷)		弁当・水筒等持参
1月 25日 (日)	午前10時～午後3時 雪のため2月11日(祝)に順延 休耕田の草刈り 場所：彼方(奥の谷)		弁当・水筒等持参
2月 22日 (日)	午前9時～12時 里山管理地の測量 場所：彼方(奥の谷)	午後2時～4時 討論会・修了式 場所：市役所401会議室	弁当・水筒等持参

◆協議会交流会

12月20日(日)午前10時～ 奥の谷

◆冊子「富田林の自然」の発行

3月31日(総会)に、200部発行しました。

1. 富田林市長「富田林の自然」発刊によせて
2. 里山の夢は広がる（副会長）
3. 奥の谷周辺のチョウたち
4. 里山管理と生物多様性（武田義明）
5. 錦織公園草花歳時記そしてレッドデータ植物について（浅野青也）
6. 奥の谷のモデル地区の将来プラン「自然環境保全活用調査報告」
7. 協議会参加団体の紹介
8. 「里山管理ボランティア養成講座」受講者の感想
9. 平成15年度事業報告（里山管理作業・自然観察会・自然環境の講座等）



ミツバアケビ(2001.10.)



ヤブツバキ(1990.3.)

◆自然環境保全活用調査

3月31日（総会）に、調査報告書を報告しました。

～市民が守り育てる自然ゆたかな里山をめざして～

1. 奥の谷モデル地区における将来プランの検討
現地踏査、南原地区の保全活用方針、自然観察路の整備方針、検討資料の作成
2. 「奥の谷花ごよみ」の作成

奥の谷花ごよみ（春～初夏）

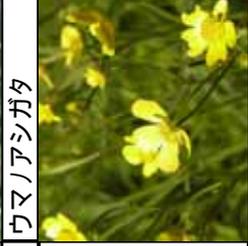
	種名	科名	原産	1～2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
春-1	カンサイタンポポ	キク科	在来種	多年草	1-5,9,12
photo by Tabuti		高さ10～20cmほど。関西(近畿地方以西)に多いタンポポなのでこの名がある。全体に小柄で総ぼう(花の下の部分)が反り返らず突起も無いのが特徴。花期は2～5月。			
春-2	セイヨウタンポポ	キク科	ヨーロッパ	多年草	1-12
		高さ20～30cm。花は早春から咲きはじめ、9～11月にも開花する。総包片は反り返り、単位生殖を行なう。欧州の原産で日本全土に帰化。都会地の空地、路傍などに多い。葉は食用となる。			
春-3	ナズナ(ペンペン草)	アブラナ科	在来種	2年草	
photo by Tabuti		高さ0～50cm。2～4月、中心より茎を出して伸長する。莖葉は互生。花は総状につき、白色小花をつける。果実は三角形で20個ほどの種子がある。広く日本全土に分布し、畑地、空地、路傍、乾田などごく普通に生育する。春の七草の一つ。和名：「撫菜(ナデナ)」と書き、小形の草姿からきたといわれる。別名のぺんぺん草は果実が三味線のバチに似ることから。			
春-4	オランダミミナグサ	ナデシコ科	ヨーロッパ	2年草	2-4
photo by Tabuti		高さ20cmほど。全草に毛が密生する。葉は対生。開花は3～5月。白色の小花を密につけ、花柄はごく短い。花弁5個。欧州原産の帰化植物で本州以南の畑地、空地に群生する。和名：「和蘭耳菜草」			
春-5	ミミナグサ	ナデシコ科	在来種	2年草	2-5
		高さ20cmほど。葉は暗紫色をおびる。4～5月開花。花弁5個で、先端2裂する。花柄は長い。日本原産で全国に分布し、畑地、荒地に生える。			

	種名	科名	原産	1～2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
春-6	オオイヌノフグリ	ゴマノハグサ科	ヨーロッパ	2年草	2-5
photo by Tabuti		高さ20cmほど。葉は下部で対生、上部は互生となる。花期は3～4月。暖地では12月から咲きはじめ、早春の花として親しまれる。花は白をうけて咲く。花冠は4裂し、碧青色で濃い色の縁条がある。欧州原産で明治初年頃に帰化。日本全土に広く分布し、畑、路傍などに生育する。和名：犬のフグリ(陰のう)で果実の形に基づく。			
春-7	コハコベ	ナデシコ科	在来種	1～2年草	2-5, 11-12
		高さ10～20cm。花は3～4月頃咲き白色、5弁で先端凹む。全土に分布し、畑地、空地にごく普通。和名：ハクベラ(古名)から転化。			
春-8	ウシハコベ	ナデシコ科	在来種	多年草	3-12
		高さ20cmほど。葉はやや紫色をおび、対生、葉面は少し波うつ。開花は5月。5花弁で花柱は5裂する。日本全土に分布し、畑地のへり、荒地、路傍に生える。和名：牛ハコベの意で大型なため。			
春-8	ヒメオドリコソウ	シソ科	ヨーロッパ	2年草	2-4
photo by Tabuti		高さ30～40cm。茎は四角形。葉は十字に対生し、上部の包葉は接してつき、紫紅色をおびる。開花は3～4月。花は茎の頂部に集まり、赤紫色の唇形花を輪状につける。6月頃全草が枯れる。欧州原産の帰化植物で本州に分布し、おもに都会地の路傍、畑地などのややわらかい土壌上に生育する。			
春-10	ホトケノザ	シソ科	在来種	2年草	3-4, 11
photo by Tabuti		高さ20cmほど。茎は四角形。葉は対生し、下部の葉柄は著しく長い。上方の葉は半円形で茎をとりまく。3～5月、紅紫色の唇形花をつけ美しい。本州、四国、九州、沖縄に広く分布し、畑地、路傍などに群生する。和名：「仏の座」と書き、初めに出る円い葉を仏の蓮華座にみたてたことによる。			

	種名	科名	原産	1~2年草 or多年草	奥の谷周辺 での開花月
春-11	タネツケバナ 	アブラナ科	在来種	2年草	3-4
	photo by Tabuti	高さ20cmほど。3~5月開花。花は白色、花弁4個。果実は細長く、熟すと果皮が裂け、反転して種子を飛ばす。日本全土に分布し、春の水田雑草としてごく普通に生える。特に湿田に見られる。乾燥地に生えるものは毛が多く、タチタネツケバナと区別する。和名：「種漬花」と書き、稲穂を水につけること開花することからつけられた。			
春-12	フキ 	キク科	在来種	多年草	3
	photo by Tabuti	早春フキノトウを出して頭花をつける。雌雄異株。雌株にできる筒状花はたいへん細い。雄株には両性花ができるが、実はできない。花がすむと地下茎の先から普通の葉が出てくる。花期は3~5月。北海道や東北地方には、非常に大きなアキタブキがある。			
春-13	スギナ(ツクシ) 	トクサ科	在来種	多年草	
	photo by Tabuti	高さ20cmほど。胞子葉(つくし)は早春出穂し、先端部に胞子穂をつける。栄養茎はつくしの後に伸長し、茎は中空で縦にみぞが4本あり、輪生状に枝を分ける。地下茎は地中を長くはい、所々に小塊がある。沖繩を除く全土に広く分布し、路傍、荒地、畑地、放棄水田などいたるところに生育する。酸性指標植物の一つ。和名：「杉菜」で葉形に基づく。			
春-14	スズメノヤリ 	イグサ科	在来種	多年草	3-5
	photo by Tabuti	高さ20cmほど。葉のへりに白毛がある。花序は1個、赤褐色で頭状に密集する。平地から山地の芝地に生える。			
春-15	カラスノエンドウ 	マメ科	在来種	2年草	3-5
	photo by Tabuti	高さ60cmほどの性の越年草。葉は互生、複葉で先端は巻きひげとなる。開花は4~6月。花は紅紫色の蝶形花。果実は扁平、熟して黒色となり、裂開して種子をばじく。本州から吸収にかけて広く分布し、路傍、空地、土手などにごくふつうに生える。			

	種名	科名	原産	1~2年草 or多年草	奥の谷周辺 での開花月
春-16	タチツボスミレ 	スミレ科	在来種	多年草	3-4
	photo by Tabuti	高さ20cmほど。葉は地ぎわから出て長い柄があり、くしの歯状の托葉が目立つ。4~5月、淡紫色の花をつけ美しい。花弁5個、唇形となり、唇弁の後に距がある。葉形、花色などきわめて変化に富み、多数の変種や品種が記録されている。広く全土に分布し、二次林や林縁に生え、時に群生する。関西地方には葉の長いイガバナチツボスミレが分布する。			
春-17	シハイスミレ 	スミレ科	在来種	多年草	
	photo by Tabuti	葉は長めの卵型で幅1~2cm。裏は紫色である。花は濃い紅紫色で花期は4~5月。距は細長く長さ5~7cm。長野県から西の本州、四国、九州に分布。			
春-18	シウジョウバカマ 	ユリ科	在来種	多年草	
	photo by Tabuti	高さ20cmほどの常緑多年草。葉は地に接して多数叢生し、光沢がある。旧葉の先端は地につくと新芽をつくる。4月、太い花茎植えに淡紅色の花をつけ美しい。花後、花茎は30~40cmに伸長する。北海道~九州の低地から高山までに分布し、林内、林縁、都木に湿原内にも生える。和名：「狸々袴」と書き、紅入りの花を狸々の顔に、葉を袴にたとえたといわれる。			
春-19	シュンラン 	ラン科	在来種	多年草	
	photo by Tabuti	高さ20cmほどの常緑多年草。葉は叢生し細長くてかたしい。4月、花茎の先端に1花をつける。花被片は淡黄緑色でほぼ同形。唇弁に美に紫色の斑点がある。本州~九州に分布し、林内に生え、観賞用に栽培される。和名：「春蘭」。			
春-20	ヒメウズ 	キンポウゲ科	在来種	多年草	3-5
	photo by Tabuti	高さ20~30cmで茎は細い。葉はやわらかくて下面が白く、3小葉に分かれ、各小葉はさらに深く分裂する。花は小さく、径4.5mmほど。がく片は白色でわずかにピンクにそまる。関東以西に分布。和名：「姫烏頭」			

	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
春-21	ヘビイチゴ	バラ科	在来種	多年草	3-4,9,(実11)
		地表をほふくする多年草。葉は互生、3小叶で長さ2~3cm、4~6月に黄色い花をつける。果実は球形、径約1cm、九州以北に分布し、水田畦などに生える。			
春-22	ミツバツグリ	バラ科	在来種	多年草	
		高さ20cmほど。葉は3出複葉。開花は4~6月。花弁5個は先端が凹む。花後に匍枝を出して新苗をつくる。北海道~九州に分布し、芝地、草原に普通に生える。			
photo by Tabuti					
春-23	イワニガナ(ジシバリ)	キク科	在来種	多年草	4
		地に接して広がる多年草。葉は卵形で長い柄がある。4~7月、黄色の頭状花をつける。そう果に白い冠毛がつき、風で飛び散る。全土に分布し、山地の崩壊地に生え、時に低地にも生育する。別名は「地縛り」の意。			
春-24	オオジシバリ	キク科	在来種	多年草	4
		ほふくする多年草。茎は地中を浅く、または地表面をはい、節から発根する。葉は互生し、長い柄があって直立する。4~6月、高さ10~20cmの花茎を出し、直径3cmほどの黄色の頭状花をつける。果実は白色の冠毛があり、風で飛び散る。広く日本全土に分布し、水田畦に多くはえる。			
春-25	オニタビラコ	キク科	在来種	多年草	4-5
		高さ30~80cm。根生葉は羽状で有毛、褐紫色をおびる。茎は直立。5~6月、茎の先端に舌状花だけの頭状花を集める。広く日本全土に分布し、空地、生垣のへり、樹園地などにごく普通に生える。和名:「鬼田平子」			

	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
春-26	キラソソウ	シソ科	在来種	多年草	4
photo by Tabuti		高さ2~5cmの小形の多年草。全体に縮れた毛がある。葉はロゼット状。茎の葉は対生し、上部は接してつき、濃緑色で紫色をおびる。開花は3~5月、花は葉の付け根に集まる。花冠は唇形状で紫色をおび、濃い色のすじがある。本州から九州にかけて分布し、路傍、林縁などに小群状に生える。別名にジゴクノカマノアタが、地面に接して広がる様子を見立てた。			
春-27	ゲンゲ(レンゲソウ)	マメ科	中国	2年草	4
photo by Tabuti		高さ15~25cm。葉は9~11個の小葉よりなり、長い柄の先に紅紫色の花がたまたま咲く。果実は熟せば真っ黒になる。中国原産。緑肥に用いられる。			
春-28	オニナゲシ	キク科	ヨーロッパ	2年草	4,11
		高さ1m内外に達する。茎は直立し、中空。葉は互生、表面に光沢あり、へりに鋭い鋸葉がある。基部は耳状とならない。開花は4~5月、ときに9~10月にも咲く。欧州原産で明治時代に帰化し、全国に分布している。畑地、空地などに生える。和名:「鬼野ゲシ」で、鋭いとげの密生する様子に基づく。			
春-29	ウマノアシガタ	キンポウゲ科	在来種	多年草	4-6
photo by Tabuti		高さ40~60cm。全草に開出する毛がある。4~6月に黄色い花をつける。花弁は5個、黄色でつやがある。北海道以南に分布し、日のおたる土手や水田の畦などに群生する。和名:「馬の脚形」と書き、根生葉が馬の脚の形に似ることから。			
春-30	アメリカフウロ	フウロソウ科	北アメリカ	1年草	4-6,9
photo by Tabuti		ゲンシヨウウコに似るが、葉は基部ちかくまで深5~7裂、葉や葉柄の毛は細かく、まるで粉のように見える。花は径8mmほどで淡紅色。花期は春~秋。			



色の濃い種類?

	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
春-31	カサスゲ 	カヤツリグサ科	在来種	多年草	4
photo by Tabuti					
春-32	キュウリグサ 	ムラサキ科	在来種	多年草	4-5
photo by Tabuti					
春-33	スイバ(スカンボ) 	タデ科	在来種	多年草	4-5
春-34	カタハミ 	カタバミ科	在来種	多年草	4-10
photo by Tabuti					
春-35	スズメノエンドウ 	マメ科	在来種	多年草	4-6
photo by Tabuti					

	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
春-36	シヤガ 	アヤメ科	在来種	多年草	4
春-37	コムツブツメクサ 	マメ科	ヨーロッパ	1年草	4-6
春-38	シロツメクサ 	マメ科	ヨーロッパ	多年草	4-11
photo by Tabuti					
春-39	スズメノテツボウ 	イネ科	在来種	2年草	4-6
春-40	ツボミオオバコ 	オオバコ科	北アメリカ	1~2年草	4-5

高さ80cmほど。5~6月、茎の先端に雄花穂をつけ、その舌に雌花穂が数個つく。雌花穂は長さ約10cm、りん片は紫褐色。北海道~九州に分布し、低地の湿原や流水辺に群落をつくる。和名:「笠スゲ」スゲ笠をつくるため。

高さ10~30cm。葉は互生。4~5月頃開花。花穂は先が渦巻き状で開花とともに長く伸びる。花は淡あじ色。全土に分布し、畑地に生える。和名:葉をもむとキュウリの香りがする。

高さ50~80cm。葉は互生、やじり形。5~6月茎の上方に円すい状に細花を輪生する。雌雄異株。雌花には赤色の3花柱がある。地下茎は黄色。日本全土の低地帯に分布し、路傍、土手、水田の畦などに普通に生える。酸性土壌の指標植物である。和名:「酸葉」の意で葉茎にシユウ酸を含み、酸味があるため。

高さ20cmほど。茎は地上をはい、節から発根する。葉は互生し、柄が長く、托葉がある。果実は熟すと種子をはじき出す。全体が赤紫色のものをアカカタハミといふ。都会地に多い。日本全土に分布し、畑地、空地、路傍などにごく普通。和名:「傍食」と書き、葉の片側が欠けていることによる。

高さ30~60cmのつる性の越年草。葉は互生し羽状複葉で小葉は6~8対あり、先端は巻きひげとなる。4~5月、繊細な長い花梗を出し、2~4個の蝶形花をつける。花は淡青紫色。本州以南に分布し、路傍、土手などに生える。和名:「雀野豌豆」と書く。

高さ50cmほど。葉は上面が内側に折りたたまれ、さらに一方に傾く。4~5月に淡青色の花をつける。長い地下茎を伸ばして群落となる。本州~九州に分布し、古く中国から伝わったものといわれる。和名:ヒオウギの漢名「射干」から。

地に接して広がる1年草。小葉は3個、中央の小葉だけが柄がある。花は黄色で長さ3mm、10個あまりずつ集まってつき、花がずんだあと花弁は淡褐色になりながら果実を包む。牧場や道ばたに帰化。

高さ20~30cm。茎は地上をはい、節から根を出す。葉は互生、長い柄で直立し、3小葉からなる。小葉は夜に上を向いて閉じる。4~6月、花茎を立てて白色の蝶形花を球状に集めて咲く。花の寿命が長い。江戸時代に帰化、また牧草として導入され、各地に野生化している。和名:「白詰草」で、ツメクサはこの草がかつて容器を運ぶ際の詰め物として利用されたことによる。

高さ20~30cm。多数の小穂を密着する。葯は黄褐色。全国に分布し、春の水田雑草の代表種である。畑地に生えるタイプも知られている。和名:「雀ノ鉄砲」は花穂を小形の鉄砲に見立てた。

高さ10~30cmの花茎を延ばし、小さな花を穂状につける。花期は5月~7月。花茎ともに全面に白色の曲がついた毛が密生し、ふわふわしている。1913年、愛知県岡崎で発見され、関東地方以西の道端や荒れ地などに広く帰化している。花冠がほとんど開かないので、いつまでもつぼみのように見えることからついた名。和名:「蕾大葉子」

種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
春-41 チチコグサ	キク科 高さ20cmほど。茎や葉の下面に白色の綿毛がある。5~10月開花。頭状花を密につける。果実に冠毛がある。本州以西に分布し、乾いたやせた草地に生える。和名:「父子草」で「母子草」に対してつけられた。	在来種	多年草	4-6
春-42 ハハコグサ	キク科 高さ20cmほど。全草にやわらかい白毛がある。葉は互生、へりは少し波をうち、葉柄に狭い翼がある。4~6月、ときに11月頃、茎の先端に頭状花を密につけ1つの花に見える。頭花の周辺は雄花、中心部は両性花。広く日本全土に分布し、畑地、空地、沼のへりなど湿った裸地に生える。春の七草のオギヨウ「御形」。和名:「母子草」と書き、冠毛がほおけ立つ様子から由来したといわ	在来種	2年草	4-9
春-43 ニガナ	キク科 高さ30cmほど。根生葉は羽状に裂け、長い柄がある。茎葉は耳状に茎をだく。5~7月、黄色の花を日中に咲かせる。日本全土に分布し、ススキ草原を中心にごく普通に生える。和名:「苦菜」は茎葉が苦味のある白い乳液を含むため。	在来種	多年草	4-6
春-44 ムラサキサギゴケ	ゴマノハグサ科 地面に接して生育する多年草。開花は4~5月、5cm内外の花茎に紅紫色の唇形花をつける。下層は大きく、3裂して2個の突起がある。雌ずいはふたまたに分かれ、触れるとすぐに閉じる。白花品種をサギシバとよび、地方によってはこの品種のみ生える。本州から九州にかけて分布し、湿った草地に生え、特に水田畦に群落をつくる。和名:「紫薺苔」の意。	在来種	多年草	4-5
春-45 ヤエムグラ	アカネ科 高さ60cmほど。茎には逆向きの棘がある。4~5月、茎の先端に淡黄緑色の小形の花をつける。果実は表面にかき状の毛があり、他物に付着する。初夏には枯れる。広く日本全土に分布し、畑地、路傍、林縁、疎林内に生え、群生する。和名:「八重葎」と書き、幾重にも重なって生えるようすから。	在来種	2年草	4-6

種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
春-46 ヤブジラミ	ゼリ科 高さ60cmほど。開花は6~7月、小白花を多数つける。果実は短い柄で球状に集まり、棘状の毛を密にし、動物について運ばれる。日本全土に分布し、林縁に生える。和名:「藪虱」	在来種	2年草	4-5



	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
初夏-1	オオバコ 	オオバコ科	在来種	多年草	5-11
	photo by Tabuti	高さ10~20cmほど。6~7月および9~10月に直立する種を出し、多数の花をつけ、下から順に咲き上がる。種子は水にぬれると粘液を出し、動物や人間の靴について運ばれる。広く日本全土に分布し、路傍、グラウンド、空地など、踏みつけの強いところに生える。和名:「大葉子」と書き、葉の広いことからきた。			
初夏-2	オヘビイチゴ 	バラ科	在来種	多年草	5
	photo by Tabuti	ヘビイチゴに似るが、花数が多く、下の葉は5小葉、花托は赤くならない。			
初夏-3	ギンギシ 	タデ科	在来種	多年草	5,12
	photo by Tabuti	高さ60~100cmほど。花期は6~7月、直立した太い茎の上部に淡緑の小花を多数輪生状につける。日本全土の低地に広く分布し、田の畦、川岸など湿った富栄養地に群生する。類似種のナガバギンギシは葉が細く、へりが強く波をうつ。			
初夏-4	タツナミソウ 	シソ科	在来種	多年草	5
	photo by Tabuti	高さ30cmほど。茎は直立し、開出毛がある。葉は対生しほほ同大。5~6月、紫色の唇形花を穂状に集めて咲く。本州以西に分布し、山道沿いに生える。和名:「立浪草」と書き、花が泡立つ波に似るため。似た仲間が多い。			
初夏-5	ドクダミ 	ドクダミ科	在来種	多年草	5-6
	photo by Tabuti	高さ20~40cm。全草紫色をおび、ふれると悪臭を放つ。葉は互生し、心臓形。6~8月、葉に相対して花穂を出す。一つの花に見えるのは花序で、白色花弁状のもののは包葉(総包片)で、中心の穂は小花の集まりである。地下茎は長く横走する。日本全土に分布し、人家周辺、溝、林縁、疎林内に群生する。和名:「毒痛み」の意とする説がある。地下茎を薬用とする。別名ジュウヤク			

	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
初夏-6	ニワゼキショウ 	アヤメ科	北アメリカ	多年草	5-6
	photo by Tabuti	高さ10~20cm。4~6月に開花、一日でしぼむ。淡紫色で、ときに白色で紫のすじのある個体がある。北米原産で明治20年頃、観賞用に導入したものが逸出し、現在、日のあたる路傍、空地に群生する。和名:「庭石昌」と書き、セキショウに似ることから。			
初夏-7	ノビル 	ゴリ科	在来種	多年草	
	photo by Tabuti	高さ30~60cm。葉は秋から地表にあらわれ、花は微紅色で5~6月開花。鱗茎はやや球型で夏に多くの球茎ができて新苗となる。広く日本全土に分布し、畑地、土手、都木に疎林内にも生える。史前帰化植物といわれる。和名:「野蒜」と書き、野に生えるヒル(ネギ類)の意。根は食用となる。			
初夏-8	ハルジオン 	キク科	北アメリカ	多年草	5
	photo by Tabuti	高さ60cmほど。茎は直立し、あらい毛があり中空。開花は4~5月。茎の頂端に淡紅色~白色の頭状花をつける。つぼみは下垂し、紅色。北米原産の帰化植物で関東地方に分布し、都会地の空地、植え込みなどに群生する。種子で繁殖するほか、地下茎でも増える。和名:「春紫苑」と書き、春咲くシオンの意。			
初夏-9	ヒメジョオン 	キク科	北アメリカ	1~2年草	5-12
	photo by Tabuti	高さ80cmほど。茎は直立し、中実。開花は6~7月でハルジオンより遅い。茎頂に白色の頭状花をつける。北米原産の帰化植物で日本全土に分布し、畑地、空地に多く、特に耕作を停止した畑地に群生する。和名:「姫女苑」。似た種類にヘラバヒメジョオンがあり、葉はへら形、山地に侵入している。			
初夏-10	ブタナ 	キク科	ヨーロッパ	多年草	5-9
	photo by Tabuti	高さ60~80cmほど。5~6月、少数分枝した花茎を叢生し、タンポポに似た黄色花をつける。花は朝開いて午後にはしぼむ。ヨーロッパ原産の帰化植物で、わが国への最初の記録は1934年。現在北海道、本州に分布し、特に北地に多い。荒地、埋立地など比較的やせた場所に生育し、ときに群生する。和名:「ブタナ」はフランスの俗名 Salade de porc に基づく。			

	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
初夏-11	ムラサキカタバミ 	カタバミ科	南アメリカ	多年草	5-9
	photo by Tabuti				
初夏-12	ヨウシユヤマゴボウ 	ヤマゴボウ科	北アメリカ	多年草	5-9(実-11)
	photo by Tabuti				
初夏-13	アキノエノコログサ 	イネ科	在来種	1年草	6-11
初夏-14	エノコログサ 	イネ科	在来種	1年草	6-10
初夏-15	アレチハナガサ 	クマツヅラ科	南アメリカ	多年草	6-11

	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
初夏-16	ヒメコバンソウ 	イネ科	ヨーロッパ	1年草	5
初夏-17	ウツボグサ 	シソ科	在来種	多年草	6-8
	photo by Tabuti				
初夏-18	オカトラノオ 	サクラソウ科	在来種	多年草	6
	photo by Tabuti				
初夏-19	ヌマトラノオ 	サクラソウ科	在来種	多年草	6~7
	photo by Terakawa				
初夏-20	オヤブジラミ 	ゼリ科	在来種	2年草	6

	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
初夏-21	ガマ 	ガマ科	在来種	多年草	6-9
	photo by Terakawa	高さ1~2mに達する大型の抽水植物。葉はむち状で茎より高く伸びる。8~9月、直立した茎の先端に円柱状の花序をつける。果穂は赤褐色に熟し、果実の基部に白色の毛がつき、風で飛び散る。広く北海道~九州北部に分布し、低地の沼や池に群生する。花粉を蒲黄といひ薬用とする。			
初夏-22	カワラナデシコ 	ナデシコ科	在来種	多年草	6
		高さ40~80cm。全体が白味をおび少数の茎を立てて、細い葉を対生する。7~10月、淡紅色の美しい花をつける。花弁は5個で糸状にさける。本州~九州に分布し、河原や草原に生える。和名:「河原撫子」は可憐な草姿から。			
初夏-23	クサイ 	イグサ科	在来種	多年草	6
		高さ30~60cm。6~9月開花。種子は湿ると粘液を出す。日本全土に分布する。和名:「草蘭」と書き、役に立たないイの意。			
初夏-24	ササコリ 	ユリ科	在来種	多年草	6
	photo by Tabuti	高さ80cmほど。茎はまばらに互生し、細長くてササに似る。6~7月、淡紅色の美しい花を数個つける。花は漏斗状で花被片はそりかえり、斑点はない。鱗茎は卵型で白い。本州中部から西、九州に分布し、草原や疎林内に点在する。和名:「笹百合」。			
初夏-25	コ克蘭 	ラン科	在来種	多年草	
	photo by Tabuti	直立した茎を有し、花は夏で暗紫色。暖温帯の常緑林床。本州、四国、九州に分布する。			

	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
初夏-26	カゼクサ 	イネ科	在来種	多年草	6.9-11
		高さ50cmほど。株は団塊状となる。葉に白色の肩毛がある。4~10月、多数の小穂をつける。小穂は6~7個の小花が葉まり、紫色をおびる。本州~九州に分布。路上、空地などに生える。和名:「風草」。誤って類似種の知風草にあてたためといわれる。			
初夏-27	チガヤ 	イネ科	在来種	多年草	6
	photo by Tabuti	高さ30~60cm。群れをなして生える。葉は立ち、かたい。5~6月、花穂を出して円柱状の花弁をつける。穂には白色の毛が密につく。地下茎は細く白色で長く伸び、甘味がある。秋に株全体が紅葉する。広く日本全土に分布し、海岸や河岸の砂地に生え、湿地にも侵入する。和名:「チなるカヤ」の意で、「千」で草が叢生することに基づく。地下茎は薬用。			
初夏-28	チチコグサモドキ 	キク科	アメリカ大陸	1~2年草	6-11
		チチコグサに比べ葉の幅が広く、頭花の集まりは穂になってつき、冠毛は元で互いにくっついて果実から離れやすく、離れてもばらばらにならない。これに対し、ハハコグサやチチコグサの冠毛は元がくっついておらず、ばらばらになりやすい。			
初夏-29	トウバナ 	シソ科	在来種	多年草	6-9
	photo by Tabuti	高さ10~30cm。茎は切り口が四角形。小さな淡紅色の唇形花が段になってつき、がくは長さ3~4mmで、わずかに短毛がある。			
初夏-30	トキワハゼ 	ゴマノハグサ科	在来種	1年草	6.9
		高さ10~15cm。ムラサキサギゴケに似るが匍枝を出さない。茎は2~3本直立する。花は総状に10個ほどつき、下方から咲きながら花茎も伸びる。きまった開花期はない。唇形花で下層は上層より大きく、2つの突起がある。分布は日本全土。休耕田、水田畦、ため池の岸、湿った庭先などにまばらに生える。和名:「常盤ハゼ」で年中開花することから。			

	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
初夏-31	キツネアザミ 	キク科	在来種	2年草	
	photo by Tabuti	高さ60~80cm。茎は直立し、中空。葉は互生、羽状に深裂し、下面に白毛が密生する。5~6月開花。頭花は筒状花のみで紅紫色。本州以南に分布し、春の水田に点在生育する。和名：「狐アザミ」でアザミに似ているが異なるのでキツネにだまされたように表現したもの。			
初夏-32	ノアザミ 	キク科	在来種	多年草	6-11
	photo by Tabuti	高さ60~80cm。全体が細毛でおおわれる。葉は互生し、羽状にさげ、上面に多細胞の毛がある。6~8月、紅紫色の頭状花をつける。総苞片は直立し、ねばる。本州~九州に分布し、日のあたる草原に生える。和名：野に生えるアザミ、ドイツアザミとよぶ園芸改良品がある。			
初夏-33	スズメノヒエ 	イネ科	在来種	多年草	6-11
		高さ40~90cm。花穂は3~5個。小穂の基部に長毛がある。和名：「雀の稗」			
初夏-34	ノボロギク 	キク科	ヨーロッパ	1~2年草	6
		高さ30cmほど。全草やわらかい。茎は直立し、まばらに分枝して赤紫色をおびる。葉は互生、不規則に羽状に切れ込む。4~5月開花し、時に秋にも開く。頭状花は黄色で筒状花よりなる。欧州原産で明治初年に帰化し、全国に広く分布する。畑地に多い雑草で、ときに群生する。和名：野に生えるボロギク(サワギクの別名)の意。			
初夏-35	ベニバナボロギク 	キク科	アフリカ	1年草	6-11
		高さ1mほど。全体やわらかい。茎は直立。葉は互生、不規則に羽裂する。7~9月開花。頭花は下向きに咲く。花は紅色。アフリカ原産で1950年頃帰化。関東地方以西に分布し、伐採跡地に群生する。			

	種名	科名	原産	1~2年草 or 多年草	奥の谷周辺 での開花月
初夏-36	ネジバナ 	ラン科	在来種	多年草	6
	photo by Terakawa	高さ20cmほど。4~8月、花茎を直立し、ねじれた穂状の花序を出す。花は桃色。横向きに咲き美しい。厩弁のふちに鋸歯がある。根は多肉でぼうぼうすい状。日本全土に分布し、シバやチガヤの草原に生える。和名：「掬い摺り」の意。			
初夏-37	ホタルブクロ 	キキョウ科	在来種	多年草	6
	photo by Tabuti	高さ30~60cm。幼苗は長い柄の葉をもち、スマレの仲間似る。全草有毛で茎葉は互生。開花は6~8月。一茎に10個ほどつき、枝の頂端の花から咲きはじめる。花色は濃紫色から白色に近いものまで変異がある。花冠はつりがね状で先端部が5裂する。北海道から九州にかけて分布し、路傍、林縁、疎林内などに生える。和名：「蛍袋」の意で子どもがホタルを入れて遊ぶことによる。			
初夏-38	ヤブガラシ 	アトウ科	在来種	多年草	6-9
		つる性の多年草。茎はよく伸長して垣根などにまっわり、高さ3~4mに達する。茎の先端はつねに下を向く。葉は互生。7~8月に小形の花をつける。花盤は朱色、密を分泌し、チョウウがよく飛来する。果実は紫黒色の漿果であるが結実はまれである。本州以南に広く分布し、暖地ほど成育は旺盛で、路傍、林縁に繁茂し、強害草となる。和名：ヤブをも枯らす勢いで生育することから。			
初夏-39	ワルナスビ 	ナス科	北アメリカ	多年草	6-8
		高さ50cmほど。茎は枝分かれし、鋭いとげがある。葉は互生し星状毛を密生する。開花は7~8月、白色~淡紫色の花を節間に数個つける。果実は球形、熟して黄褐色となる。北米原産で関東地方では畑地の強害草となっている。			

富田林の自然を守る市民運動協議会

富田林の自然を守る会	田淵武夫
錦織公園自然友の会	松原安茂
NPO 法人里山倶楽部	寺川裕子
石川あすかプランを考える市民連絡会	笠原英俊
富田林勤労者山岳会「嶽の会」	上角敦彦

オブザーバー

日本国際ワークキャンプセンター関西事務局 初田裕美

事務局

富田林市総務部生活環境室

稲田照雄，京谷 守，中尾友保，竹谷佳洋

〒584-8511 富田林市常盤町1番1号

TEL 0721-25-1000 (内422) FAX 0721-25-9980

e-mail seikatsukankyo@city.tondabayashi.osaka.jp

富田林の自然

2004年3月31日 発行

編集 富田林の自然を守る市民運動協議会

発行所 富田林市総務部生活環境室